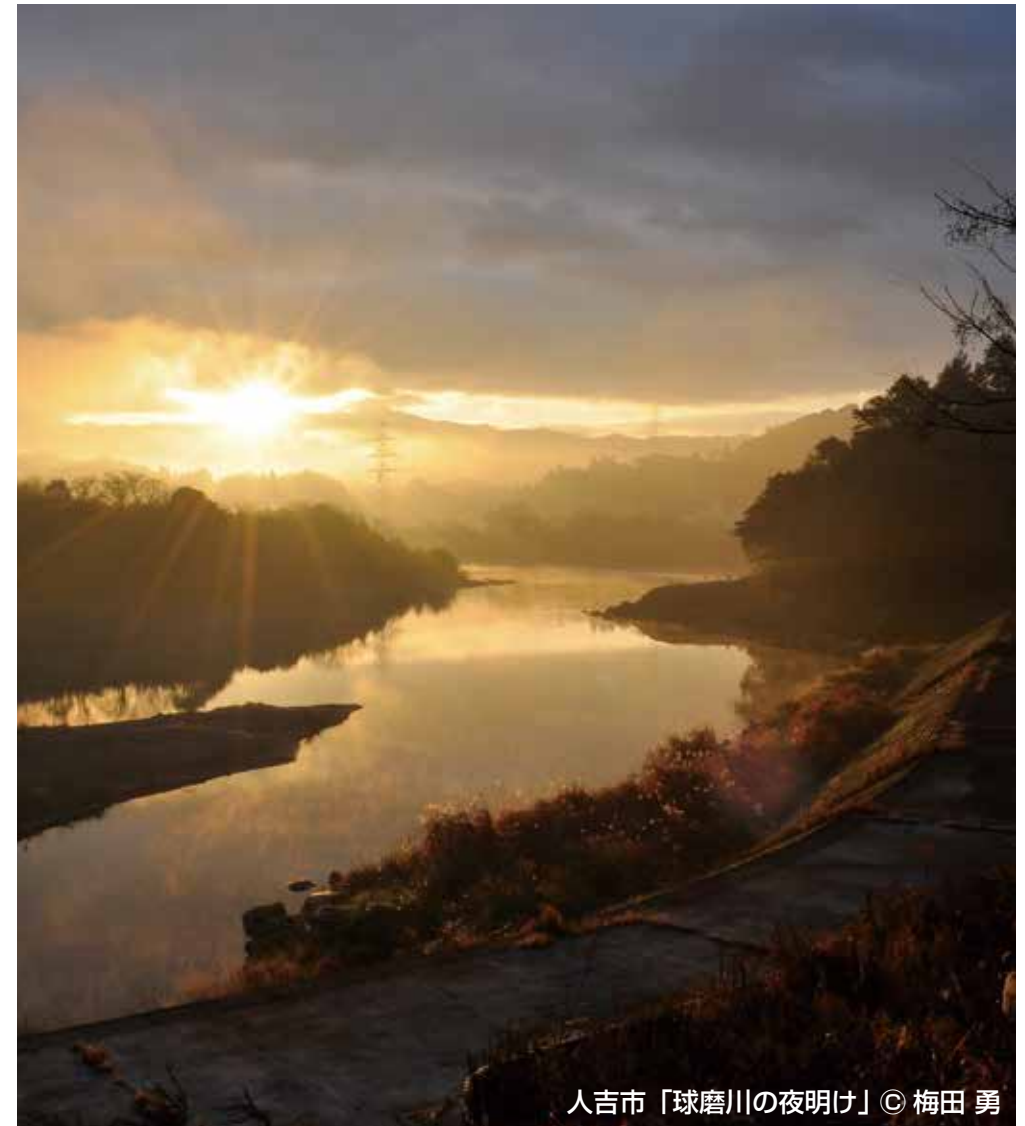


流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2016
12
第9号

すべては、これから



人吉市「球磨川の夜明け」© 梅田 勇

月に願いを。

緋月 せんげつ

Japanese Traditional Rice Shochu
SENGETSU



緋月城（人吉城跡）にて撮影

緋月酒造株式会社
SENGETSU SHUZO CO., LTD.

〒868-0052 熊本県人吉市新町一番地 TEL 0966-22-3207

飲酒は20歳を過ぎてから。飲酒運転は法律で禁止されています。
妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発達に悪影響を与えるおそれがあります。

<http://www.sengetsu.co.jp/>

雑誌 81779-12



4910817791267
00500

月刊 くまがわ春秋 第9号 2016年12月15日発行

企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社

〒868-0086 熊本県人吉市下原田町瓜生田 675-3

TEL 0966-22-7601 / FAX 0966-22-7601
<http://www.hitooyoshi.co.jp/> info@hitooyoshi.co.jp

定価 540円

本体 500円

すべては、これから

「地震の恐怖は今にも続く」前田一洋／4
 「宮城への復興支援の旅に出た」上杉芳野／6
 「多彩な出し物が魅力の八代妙見祭」早瀬輝美／9
 「第1回坂本100人会議」坂本桃子／12
 「天かける芳野と愉快な仲間たち」宮原信晃／25

— 12月(第9号) 目次 —

カラーページ

ほいくの絵⑨「こがね保育園」／16
 東儀一郎写真館⑧「発電の日」／18
 駅ものがたり⑨「球泉洞駅」松本晋一／20

記憶の落ち穂⑨ 坂本福治／17
 東京オリンピック⑨ 荻田吉富／29
 倉敷便り① 原田正史／30
 定吉が行く⑨ 鳥飼博／32
 くまがわすじの考古地誌④ 木崎康弘／36
 笑評・極々最近冥界事情 椎葉直美／40
 冬至十日前 山下完二／42
 医食同源⑤「暦と食文化」浦川春加／46
 団塊の世代の「おくんち」益田啓三／48



荒田観音堂の復活を望む 溝下昌美／50
 小山勝清生誕120年特集⑦ 上田精一／54
 柳人があじわう漱石俳句⑨／57
 建築みである記「莊厳寺」森山 学／58
 「町家ギャラリー立山」① 山口啓三／62
 くまがわ英語塾⑨ 藤原 宏／64
 くまがわの神さん仏さん⑦ 宮原信晃／65
 くまがわ春秋歌壇 いもご短歌会／67
 不知火海の自然・生活④ つる祥子／68
 一度は行ってみよう今泉地区／73
 今泉薪窃盗事件 上村雄一／77
 くまがわ狂句 村上鬼拳／79
 「君の名は。」を観ましたか 平岡優平／80
 鶴鶴短歌会／82
 私と犬童球溪記念館 鶴上寛治／83
 山神祭 上村雄一／86
 石橋を訪ねる「橋詰橋」／87
 坂本の舟頭、都城へいく。／88
 二宮金次郎 城木松男／91
 字図で見る球磨の地名⑧ 上村重次／92

今月の詩 ⑨

人吉球磨児童生徒文詩集「やまざり」から

第34号(2006年3月発行) 選・作文の会

つり

ぶくぶく
 川の流れる音
 岩の上からつりをした
 ぼくはつれるのをまった
 さおがビクツとした
 思わず立った
 ぶくぶく
 川の流れる音
 なかなか
 なかなかつれない

急に足もとがすべる
 岩の上からぼくはおちた
 バシャーンブクブク…
 あわてて立ち上がる
 魚はつれていない
 でもぞうりが ほくの横を流れていった
 【評】釣りをして獲物をねらっている様子がわかる。二回使われている「ぶくぶく」で、なかなか釣れずに待っているのがわかる。釣れずに残念だった気持ち、流れていくぞうりに象徴され、伝わってくる。

今月の一言 『文読む月日』 (レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳) より

理性的存在者の特質は、自由なる者として己れの運命に従う点にあり、動物に特有な運命との見苦しい争いではない、ということをお忘れではない。

表紙写真

「球磨川の夜明け」
 (人吉市七地町
 花立から撮る)

撮影 梅田勇(人吉市)





宮城県の東松島市を視察する人吉球磨の復興支援のメンバー



東松島「福幸まつり」会場に到着した一行



ユネスコ無形文化遺産に登録された「八代妙見祭」の鉾



先月開催された第1回坂本 100 人会議

激動した今年一年も暮れようとしているなかで流域が元気になり、新たな胎動を感じさせる3つの話題を追った。5年前から東日本大震災の復興支援をしている人吉球磨の市民グループが現地を訪れ直接義援金を届けたことや、ユネスコ無形文化遺産に登録された八代妙見祭の話題、住民が町づくりを考える「坂本100人会議」の立ち上げの様子をご紹介します。

すべては、これから

流域の震災復興・文化遺産
地域振興の話題を追って

巻頭言 儀三郎の日記

昭和2年12月、儀三郎は新しい帳面を買った。家督を継ぎ家長になったので日記をつけることにした。翌3年元旦から日記を書き始めた。「実祝い」と書き、2日には「朝祝い」と書いた。「実祝い」・「朝祝い」がなにかを儀三郎は記していない。翌3日、妻・サミは実家に年賀のあいさつにいった。儀三郎は年賀を「年玉」と書いた。彼の母も実家に年賀にいった。儀三郎は同じく「年玉」とした。母を「ばさん」と書いた。長男・儀三次は学校にでかけた。儀三次は後に戦死する。娘・ミワと美代子は遊びにでかけた。儀三郎には儀三次のほかに男の子はなく、儀三次の死後、儀三郎は美和子に婿をとらせた。4日、弟・円次郎夫妻が年賀にやってきた。円次郎夫妻は儀三郎宅に宿泊せず親戚宅に泊まった。親戚たちが次々に年賀のあいさつにおとすれた。仕事仲間も年賀にきた。儀三郎は名前だけを帳面に記した。

7日すぎてから儀三郎は野良仕事をはじめた。土地は奥地にあつた。妻・サミと仕事した。サミは社交家で、親戚に法事があればサミがいった。儀三郎は小学校であつた講演会を聴きにいくときもあつたが、黙々と仕事する人だつた。

儀三郎は6月半ばまで日記をつづけた。心情を書かず、出来事だけを記した。儀三郎は地主の名には敬称をつけて日記に記した。儀三郎は野良仕事とは別に筏を流す仕事をしていた。彼は焼酎を好んだ。仕事仲間と呑み、近所の者とも呑んだ。儀三郎は町で買ひ物をし、それを帳面に記録した。

儀三郎はこの帳面のほか日記を残さなかつた。彼は帳面を死ぬまで手元に置き、ときどきながめた。

書店に行くと、日記やスケジュール帳が並んでいる。昭和3年に日記はどれだけ普及していただろうか。彼の同胞たちも日記を書いたであろうか。恐らく、儀三郎は例外の人であつた。それゆえ帳面を生涯にわたり大切にした。

本誌は儀三郎の日記にならんことを欲する。

(編集部)

地震の恐怖は今にも続く ―慰問から戻った翌日にM7・4

「立ち上がれ東日本！震災復興支援チャリティーショー」後援会長 前田一洋



東松島「福幸まつり」であいさつする筆者

「立ち上がれ東日本」をモットーに、平成二十三年から支援活動をしてきた私たちは、今年で六年目が過ぎた。その上「熊本地震」までもが加わったために、今後の活動方針の参考にしようとして宮城県の東松島市を訪れた。

その「野蒜地区」という所は、テレビニュースなどでもご承知のように、十メートルを超す巨大津波のため、市街地全体が消滅してしまった被災地。そこで、大きな山を削って平地を造成し、鉄道も付け替え、駅や住民センターができ上がっていた。

今後は住宅街もできるという、その復興の祭りにも参加して。

イベント会場では、チャリティーショーの益金を支援金として市長さんにお渡しし、愛甲あさぎり町長のメッセージもお伝えした。また特設ステージでは歌や踊りを披露してその後、方々の災害地の実情を見せて頂いた。

「果たしてここに市街地があつて、様々な人々の暮らしが営まれた所なのだろうか」。先ずはその疑問に悩まされた、何百という墓以外には何もないのである。ただ、どこそこに、枯

れ果てた樹木の幹が残ってはいたが。

そうした土地が延々と続くのだ、そして太平洋に面した海岸には、まるで山脈のような堤防が築かれつつあり、完全に人と海とを遮断していた。その向こうの海こそ、金華山沖の素晴らしい漁場で、あらゆる魚介類が水揚げされ海苔や牡蠣の大宝庫でもあったのだ。

また津波による鹹水に侵された水田や畑からは、かつて良質の米が収穫され、特産の野菜や果物が生産されていたのであった。そこが今や弱々しい力やなどが生えているだけ。おそろく、その再生には相当な時間がかかることだろうし、再

度の津波が来る可能性も。

しかし現地の人たちからは如何にも粘り強く、また人情豊かな姿が見てとれ、むしろ訪問した自分たちが学ばべき事が多かった。

私たちの訪問は十一月十九日から二十一日までの三日間であつたが、同行して下さったあさぎり町役場の早田愛一郎さんのお世話で多大な成果を収めることができた。また仙台市ご在住で俳優中原丈夫さんの伯父にあたるれる養田了介さんとも出会い、被災地の実情を具体的に教えていただき有り難かつた。

ところでわれわれには、一度大きな災害を被つたなら、後はその復興に邁進するだけ。つまり、これでおしまい、そんな感覚があるように感じられる。それは一種の願望でもあり、で



造成が進む野蒜北部丘陵地区（東松島市ホームページより）

すべては、これから

夢かなう —宮城への復興支援の旅に出た

芳野と愉快な仲間達 上杉芳野

きることならそうあって欲しいのだ。
しかし現実はまだことに厳しい、あろ
うことか私どもが戻った翌朝のこと、
M7・4という地震が起きていたでは

ないか。つい一日前まで、自分たちが
いたところにある。早速蓑田さんか
ら電話があり、二メートルもの津波
が襲い、収穫中のノリやカキに甚大

な被害を与えたとのこと。忘れた頃
どころか、まだ復興の途上でも遠慮
なしにやつて来るのが天災だ。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

五年前の三月十一日、東日本大震
災が起こった。あの有名な東松島市も



家屋の瓦礫が滞積した大曲
浜（平成23年3月、東松
島市ホームページより）

津波が押し寄せ車や家が流され、屋
根の上で助けを求める人、信じられ
ない出来事だった。

震災に遭われた人々の中には
親や子供を亡くされた方が沢山
おられる事を知った時、じつとし
ていられなかった。私も一歳一ヶ
月の時に産んでくれた母が亡く

なり、成人して初めての長女も生後
二十七日で亡くしているのだ。今まで
に何度「こんな時に親が生きていた
らなあ」と思っただろう。亡くした
長女と同じ年頃のお子さんを見ると、
節目節目に「ああ、もうこんなに大
きくなっているんだ」といつも心の中
で忘れる事はない。

そんな私が考えついたのが、「チャ
リティーショー」。

福祉施設やいろんな所でボランティア
活動を通じて知り合った仲間に声
を掛け、人吉球磨の素人芸人さんた
ちにも協力をしてもらい、「東日本大

震災復興支援チャリティーショー」を
立ち上げた。第一回から四回目まで
はショーで頂いた支援金は、あさぎり
町の社協を通じて日赤に届けてもらっ
ていた。しかし「現地に直接行って心

痛んでいる人達に、笑いや元氣と共に
この手で直接支援金を渡したい」と、
五回目からは支援金をプールしてお
き、私たち仲間毎月三千万の積み
立てをして何とか旅費を蓄えた。

運良く、あさぎり町から宮城県の
東松島市に支援のために派遣されて
おられた、あさぎり町役場の早田愛
一郎さんに協力を求め、東松島市と
の交渉役を務めて
頂いた。

それが今回、
十一月二十日に東
松島市で「ひがし

まつしま福幸まつり」が開催されるの
でその祭りに出演できるようにした
のだ。

天気はどうだろう、東日本は寒く
はないのか？ 不安のままに私たち九
名は福岡空港から飛行機に乗った。
私は飛行機が怖くて怖くて足が震え
る思いのままに乗り込んだ。飛び立つ
時には、前の人の座席をしっかりと握り
しめた。（帰りの飛行機は前田一洋先
生の後ろだったので、両手で先生の背
広をグッと引つ張り、座席を引き倒
しそうになった）。

仙台空港から東松島市に入り一
泊。早朝から「ひがしまつしま福幸ま
つり」会場に向かった。

現地に着くと、地元のカキ、ホタ
テなどのお店が並び、久しぶりの祭り
とあって大勢の人達が集まっておられ



東松島市長に支援金を贈る前田一洋先生



東松島市長の広報誌 12月号表紙



中国風の獅子舞

この度、八代妙見祭（以下妙見祭）が、京都祇園祭の山鉦行事ら国の重要無形民俗文化財に指定されている32件と合わせて「山・鉦・屋台」としてユネスコ無形文化遺産に登録されました。妙見祭は、「八代妙見祭の神幸行事」として熊本県で唯一「祭礼」として国指定となっています（註1）。全国に1500はあると言われる山や鉦の出る祭



明治時代の木馬

礼の内の33件に入っているのですから、ユネスコ登録以上に国の指定文化財になっていることは意義深いことなのです。妙見祭は、「妙見さん」として市民に親しまれている八代神社の秋の大祭です。11月22日に神輿を中心とした神社の

すべては、これから

多彩な出し物が魅力の八代妙見祭

八代市立博物館未来の森ミュージアム学芸員 早瀬輝美

た。メイン会場の舞台にはチャリティーショーの会長である前田一洋先生と早田愛一郎さんが立たれ、司会より「熊



特設会場に勢揃いした「芳野と愉快的仲間達」

本県から『芳野と愉快的仲間達』が支援金をもってこの祭りに駆けつけて頂きました」と紹介された。

まず、前田先生がチャリティーショーで集まった二十万円を東松島市長に手渡しをされ、あさぎり町長からのメッセージを早田愛一郎さんが代読。その後、私たちの出番となり、特設会場（といっても観客が通る路上にブルーシートを敷いて）まるで大道芸の役者のように、歌や踊り、チョンカケ独楽を披露した。私の出番では、こちらの役場の方々にお力を借りて、六名の人に「綺麗な衣装（女装）」を着て頂き、いつもの「宝塚劇団バラバラ組」で踊りを踊った。

最後は前田先生が「旅愁」を指揮され会場の人達と一緒に大合唱をしたのだった。

歌い終わって、地元の人達と何人も何人も、握手をして回った。もう、私たちの踊ったシートの周りには笑顔の人達に囲まれている。

「ありがとう」「面白かった」「ありがとうね」とお声が掛かり、「あー！来て良かった！これからも支援を続けなければ！」と決心をしていた。これから、熊本地震の支援も元氣と笑いを一緒に届けよう。

同行してくれた仲間、チャリティーショーに来て頂いたお客様に感謝。これまで参加協力してくれる多くの人達、家族のお陰で夢がかなった。ありがとう、感謝でいっぱい。

【うえずぎ・よしの／球磨郡あさぎり町】



勢揃いした9基の笠鉦

現在の笠鉦を見ると、2階建ての楼閣のようです。しかし、中の構造を見ると、笠鉦を支える柱は1本しかありません。組み立て式の笠鉦は、200〜300の部材で構成されていますが、さまざまな部材は上笠部分の骨組み

長崎くんちの傘鉦は、現在も一人持ちの傘鉦で、傘の上には町の由来や町名に関する飾りがつく町印です。長崎では7年に一度奉納の当番が回ってくることで、町の出し物が傘鉦だけでなく、川船や龍踊、日本舞踊などがあることから、傘鉦は町印の役割を持ち続けてきたと思われます。八代の場合は、毎年同じ町が出て、出し物は笠鉦以外にはないことから、町印の要素が次第に薄れ、不老不死や商売繁盛の願いの込められた飾りへと変わっていったのでしょう。

現在の笠鉦を見ると、2階建ての楼閣のようです。しかし、中の構造を見ると、笠鉦を支える柱は1本しかありません。

組み立て式の笠鉦は、200〜300の部材で構成されていますが、さまざまな部材は上笠部分の骨組み



妙見祭の人気者亀蛇

行列の先頭は獅子です。長崎くんちの獅子踊を見て感銘を受けた八代の商人が、長崎で見聞きた珍しい風俗も取り入れて作り出したもので、毛むくじらの胴に大きな尻尾、長い耳を持つ獅子です。ドラやチャルメラ、長ラッパといった外国の楽器を用いた異国情緒豊かな獅子舞は、当時の人々をどれほど驚かせたでしょう。

妙見祭の人気者亀蛇は、妙見神が海を渡って来た時の乗り物であるという伝説を元に作られています。縦横無尽に河原を走ったり観客の中に突撃したりと暴れ回ります。奴は、松井家の江戸参府

にお供をした鍵持ちが、江戸で奴振り（奴の演技をする）と）を習ってきたのが始まりです。祭礼の中で披露される奴振りの中でも全国的に早い例です。奴の人たちは、創始者が松井家の鍵持ちであつたという誇りを持ち続けた人たちで、現在でも八代神社で奉納後、旧八代城主松井家に奉納に行っています。

木馬は、作りものの馬に子供が入って練り歩くもので、松井寿之が70歳の祝いに家臣と町人が出したのが始まりです。江戸時代は、商家の子供が武家に扮して華やかな飾りの付いた木馬に乗っていくのが見所でした。

この他にも出し物は多々ありますが、今回のユネスコ登録の対象となったのは、旧城下の町々から出される9基の笠鉦です。松井家文書には宝永年中（1704〜1710）の宮之町の笠鉦についての記述があります。それによると、一人持ちの傘状の出し物で、傘の上には、町名を記した飾りが付いていたとあり、初期の笠鉦が町印の要素を強く持っていたことがわかります。元文3年（1738）には二重の傘で4人持ち、菊慈童の作り物がつくものになり、その後、8人で担ぐ笠鉦へと変貌を遂げました。

に何らかの形で連結しています。言い換えるならば、柱は傘の柄、上笠は傘を開いた部分にあたり、一人持ちの傘がそのまま大型化し豪華になったのが笠鉦なのです。同様の形状を持つ笠鉦はどこにもなく、オンリーワンの存在です。

妙見祭が長年にわたって多くの観客で賑う祭礼であり続けたのは、それぞれの出し物に異なる魅力があつたからだだと思います。そこには、松井家の保護と八代が様々な物や人情報が入りする港町であつたことが背景としてあるでしょう。獅子や奴、木馬、亀蛇は周辺地域の祭礼にも取り入れられており、人々にとつていかに珍しく憧れるものであつたかがうかがえます。

八代市立博物館では、来年2月3日より笠鉦の謎に迫る「笠鉦大解剖2 ―これぞ町印！ 本町本蝶燕―」展を開催します。ユネスコ登録により妙見祭への関心も高まってきています。皆さんもぜひおいでください。

註1

熊本県内では「阿蘇の農耕祭事」が生産・生業「菊池の松囃子」が渡来芸・舞台芸、「球磨神楽」が神楽で重要無形民俗文化財に指定されている。

第1回坂本100人会議

坂本 桃子

八代市坂本町で先日、「第1回坂本100人会議」が開催された。

「100人会議」という言葉を初めて耳にした方も多いかもしれないが、実はこの「100人会議」は今、全国各地で開催されている。

「100人会議」とインターネットで検索すると、「ママ100人会議」や「福祉100人会議」、中には「認知症になつても安心して暮らせる町づくり100人会議」といったものまでヒットした。世の中は空前の「100人会議」ブームなのかもしれない。会

議の進め方や手法なども、主催側によつてさまざま、いろんな「100人会議」があつて面白い。

しかし、各地で開催されている「100人会議」のそのほとんどが、地方創生の流れによる、まちづくりのための「100人会議」である。

前置きが長くなつたが、坂本町の「100人会議」はまぎれもなく、「自分たちの住んでいる町をよりよくしていくこう」という、まちづくりのために開催された。

代わる組織であり、それまではダム撤去に伴う地域の課題解決に向けて取り組んでいたが、これからは、ダム撤去後の球磨川を活かした地域振興についても考えていくと、この部会が設置された。部会には、3つのチームがあり、「ポートハウスの活用とソフト

事業展開」「川を活かした坂本らしい暮らし・仕事検討」「まちの名所ネットワーク検討」に分かれている。部会には坂本町の住民も参加し、2〜3か月に1回の頻度で会議が行われていた。今回この「100人会議」を開催したのは「まちの名所ネットワーク検討」チームである。

「まちの名所ネットワーク検討」チームは元々、坂本町の観光資源の発掘や開発をし、その資源を活かしたルートづくりや事務局機能の強化をしていくというものであった。しかし坂本はそもそも、上松求麻村、下松求麻村、百済来村が合併し、坂本村になったのであり、(そして更に八代市と合併したわけであるが)とてつもなく広く、地区の数は70ほど存在する。坂本村時代、小学校は8つ存



今回「第1回坂本100人会議」を主催したのは、「荒瀬ダム撤去に伴う地域づくり部会」である。この組織は、昨年2015年の9月に熊本県の企業局によつて設置された。前身の「荒瀬ダム撤去地域対策協議会」に

在し(分校を除く)未だにその当時の校区ごとのつながりが強く残っており、なかなか住民は他の校区へは足を運ばず、関心もない。これは坂本の大きな特徴のひとつであり、課題であるといえる。そんな背景があるため、本当に町の資源の情報を隅々まで拾おうと思うと、すべての地域の、多くの住民からの情報が必要となる。そこで、このチームでは、なるべく多くの住民からの正確な情報を得るため、「坂本100人会議」を開催するに至ったのである。

そしてもうひとつ忘れてはいけない、大きな目的があつた。それは「坂本住民自治協議会」の存在である。時を同じくして、この組織も大きく動きはじめていた。坂本住民自治協議会は、2014年4月に設立され、「球磨川



坂本公民館で開かれた「第1回坂本100人会議」
(11月25日)

再生シルバー事業」をテーマに掲げ、2017年の鮎やかな設置に向けて活動に取り組んでいた。しかし、坂本町には上に挙げたような課題があったため、なかなか住民にも定着せず、協力体制を整えることに苦戦していた。

そもそも、坂本には8つの地域振興会というものが存在し、坂本町全体というより、旧校区単位での地域振興の方が盛んであった。そのため「坂本住民自治協議会」という坂本町全体でのまちづくりを考える組織というのが、坂本の歴史上、実質初めてのよ



うなものだったのかもしれない。確かに、小さな単位でまとまり、自立して活動していることは素晴らしいことであるが、既に町の高齢化率は50数パーセントまで進んでおり、危機的状況をむかえている旧校区も存在する。そのため、旧校区に拘らず、やはり町全体でまとめる必要があるのではないかと言う住民の声も聞こえはじめた。「坂本住民自治協議会」はその可能性を秘めており、まずは広く住民に知ってもらい、会の活動に協力してくれるメンバーを集める必要があった。

「坂本100人会議」は、まさにそのためにうつつけの会議であり、住民のまちづくりへの合意形

成や人材発掘、情報収集などさまざまな目的を兼ねた、ある意味「賭け」の会議となった。

今回の100人会議では、20代から80代まで、町内の8つの旧校区から約10名ずつ声をかけた。また住民だけでなく、町内の飲食店や施設、旅館・民宿、保育園、小中学校、町おこし団体や組織にも参加をよびかけた。これに加え、主催である「荒瀬ダム撤去に伴う地域づくり部会」のメンバーや、行政職員、企業局、コンサルタントも参加し、総勢約70名となった。100名にはならなかったものの、見事にバランスよく全ての年代の参加者が集まり、主催側としては予定を上回る人数の参加となった。

肝心の100人会議の内容についてであるが、今回は第1回目ということ

で、今後継続して開催していくことも視野にいれ、どの世代でも考えやすいテーマが設定された。ざばり、「坂本町の魅力(○)と課題(×)」である。

主催側としては、今回の100人会議はあくまでも導入であり、まずは住民同士の横のつながりを持つってもらうこと、コミュニケーションをとってもらうことに焦点をおいた。旧校区内であれば、ほとんど住民同士も顔見知りであるが、旧校区を二歩越えると、同世代であつても知らない人ばかりである。そのため、今回は旧校区ごとではなく、あえて年代ごとにテーブルを分けて参加者に座ってもらった。一方で、同世代であれば話がしやすいのではないかと狙いもあった。

その作戦が功を奏して、和気あいあいの雰囲気の中、忌憚のない意見交

換が行われた。ここでは、全ての年代から出た意見を紹介したいところであるが、スペースの関係上困難であるので、参加者から寄せられた「第1回100人会議」についての感想を中心に紹介したい。

・「20代から出ない意見が他年代から出ていて勉強になった」(20代)

・「若い人が斬新な考えをもっている」(70代)

・「次回は10代の参加者も来てほしい」(40代)

「間髪いれずに第2回の開催を」(80代)

・「基本的な考えはみんな同じである」とわかった」(60代)

・「こんなにたくさんの方々とふれあう機会は初めてだったので感動した」(60代)

といったものである。

特に面白いと思つたのは、「若者が、高齢者のマイナスイメージをプラスにとらえていることがわかった」(60代)という意見である。どういふことかというところ、「空き家がある」ということについて、高齢者は課題(×)の方に分類しており、デメリットだと考えているが、若者は魅力(○)の方に分類し、メリットだと考えている。これはとても興味深い内容であった。

今回出された意見を元に、今回の100人会議からは本格的なテーマが設定されることになる。坂本町は今、間違いなく転換期をむかえており、町ではさまざまな動きがみられる。遡れば、上松求麻村、下松求麻村、百済求麻村が三村合併して約55年。当時の人口は1万8千人を超えていたが、

記憶の落穂

その ⑨

絵と文／坂本福治



「湖畔」のモデル
私が二十何歳の頃、黒田清輝の「湖畔」のモデルを訪ねたことがある。九十五歳。絵の姿とはかなり違うが、目の光が美しいと思った。思い出話をいろいろされた。結婚前、清輝には二つの縁談があった。一つは金持ちの娘だった。「主人は貧乏の私を選んでくれました」と。九十五歳でこんな言葉が出る人を、私は深い感動をもつて見つけた。
私は話の種にと思い、黒田清輝の画集を持参した。夫人はていねいに頁をめくりながら、「これもいい絵でしたよ」となつかしげに言われた。
六十二歳の姪さんが世話をしておられたが、夫人の裸を描かれた作品は一切ないと強調された。「湖畔」の絵は、湖の近くの寺に鍋釜を持参して泊まり、「天変でしたよ」と。姪さんが「あれでも苦労したつもりなんです」と、私にだけ聞こえるように言われた。黒田夫妻はボートを漕いで出たが、水が入り出し、パニックになった。「あの時は死ぬのかと思いましたが」と、夫人が言われた。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

西日本製紙工場の閉鎖に始まり、11年前の八代市との合併で更に人口減少に拍車がかかり、現在はついに4千人を切ってしまった。高齢化率は県内トップクラスの50数パーセントとなっている。
そんな中、日本初の県営荒瀬ダム撤去が決まり、清流が取り戻されつつある球磨川への期待とそれを活用した新たなムーブメントが町内のみならず、町外でも起こりつつある。しかし一番大切なのは、ここ坂本町で生きる住民たちが、この町をどのようにしていきたいのかを考えることであり、今こそ住民がひとつになって町の未来を描き、それに向けて前に進んでいく必要がある。坂本100人会議はそのための第1歩であり、さまざまな可能性を秘めている。同時に、坂本住民自治協議会を中心とした町全体での取り組みにも期待がよせられるところである。ダムを壊してしまうくらいエネルギーとパワーのある坂本の住民たちが持つ底力がいかなるものか、これからの見どころである。

【さかもと・ももこ。八代市坂本町】

シリーズ ほいくのなかで描いた絵 ⑨

こがね保育園 (球磨郡球磨村)

球磨村では「子どもは未来の宝」として子育て支援に力を注いで頂いています。その担い手として、当園では「地域に愛される保育園」を理念に掲げ地域のイベント等に参加し、子どもの元気な声、笑顔をお届けすることで、地域の方から「元気をもらった～」と喜ばれています。これからも、子ども達が心身共に健やかに成長できるよう日々保育に取り組んでいきます。



「楽しかったよ卒園旅行」

はきあい みさき
吐合美咲ちゃん 6歳



社会福祉法人 智雲山福祉会「こがね保育園」
創立 昭和18年4月1日
認可 昭和23年6月30日
〒869-6403
熊本県球磨郡球磨村大字一勝地丙90番地1
☎: 0966-32-0421
FAX: 0966-32-0133

昭和の写真館 8

旧坂本村中心に昭和 20 年後半から 40 年後半までの出来事をカメラに収めていた故・東儀一郎さんが残した写真を紹介する。

撮影／東儀一郎

発電の日



荒瀬ダム関係の写真は多数あるけれども、今回の写真はめずらしい。写真を見ると、荒瀬ダムは完全には完成していない。堰堤や道路は工事中である。それにもかかわらず労働者の姿が写っていない。

見学者は正装に近い身なりで紋付羽織姿の女性もいて、なんらかの式典があったことをうかがわせる。そういう日があるとすれば昭和 29 年 12 月 25 日しかない。同日、荒瀬ダム・藤本発電所は営業運転を開始し簡素な祝賀会が催されたのであった。他方、竣工日は翌年の 3 月 31 日である。電力不足のため工事が完全に終了するまでに発電を開始したのだが、当時の新聞をみると予定通りの工程である。

熊本県企業局は、竣工日ではなく営業発電を開始した 12 月 25 日を「発



式典があったことをうかがわせる見学者の正装。昭和 29 年 12 月 25 日の祝賀会の日か？



「殉教者慰霊塔」12 名の名前が刻まれている。そのなかには 16 歳の少年が 1 人、17 歳の若者も 2 人いる

電の日」と定め、工事によって犠牲になった労働者の慰霊をその日に実施している。

写真には管理棟と管理棟内部を覗き込む見学者の様子が写っている。管理棟は来年 3 月までに解体される予定である。



河口から上流まで、その駅を訪ねる

球磨川の駅 ものがたり

連載その⑨ — 球泉洞駅

熊本産業遺産研究会 松本晋一



球泉洞

白石駅から瀬比良山トンネルを過ぎ、天月に分岐する小口トンネル手前から大坂間にかけての小口ノ瀬ノ網場ノ瀬間、この一帯が球磨川下り一番の風光明媚な流域とされる。110年前の白石付近の絵葉書（図①下）



図① 新旧の小口ノ瀬付近
（上：現在 下：110年前・鍋屋本館所蔵）



と今（図①上）とても殆んど変化はない。この絵葉書には一人船頭の下り舟、中央に鉄道工事用の小屋？と出来たばかりの小口のトンネルが伺える。

大野大橋の直下左岸には、球磨川舟運を開いた林正盛が寛文二年（1662）に開削した亀割り石（図②）があつた。

② があつた。
続く大瀬橋を過ぎると前方に球泉洞・森林館のドーム（図③）が見えてくる。

球泉洞は昭和48年、愛媛大学探検部により発見された九州最長の4・



図② 亀割り石付近



図③ 球泉洞・森林館ドーム



図④ カナダ製T型フォード（上）と森林軌道車（下：塗替え前）



和17年（1942）12月、仮乗降場として開業。戦後、旧近隣町村の誘致運動が功を奏し、同22年3月に大坂間駅に昇格。昭和33年9月の瀬戸石ダム完成によ

8 kmの奥行を持つ鍾乳洞。ここを中心に森林館、吊り橋、国民休暇村などのアミューズメントパークが造られ昭和50年に開洞。当時の年間観光客は50万人に達している。平成22年には219号線上に新しい球泉洞トンネル（1190 m）が開通。しかし、平成24年4月の水害で森林館・エジソン館が土砂で埋まり、その復旧にはまだ目途がついてない。所蔵の電気自動車他は地域の宝であり今後の活

用が危惧される。幸い球泉洞入口の1928年製カナダT型フォード（図④）と旧森林鉄道軌道車（SKK・C型機関車）の無事は乗物ファンには嬉しい。

今、この球泉洞施設は、以前「いつか沿岸道路が裏街道になる」（新・球磨学）と言われた時代の波を乗り越え、球磨川下りとうとう共存するかを模索している。そのためには球磨川下り（激流コース、ラフティング他）と

の多様な活用が決め手となりそうである。新手を打つことで、ここ数年の底冷えにも目途がつくことであろう。川下りは筆者も小中学時代には複数回乗船し、この下の「槍倒ノ瀬」のこのスリルは他の瀬では味わえない感覚を憶えている。

球泉洞駅（旧大坂間駅）

鶴之巣、告、舅落の3トンネルを出て直ぐの、この駅の始まりは昭和

り急流も様変わり、昭和30年代中頃から大坂間駅が球磨川下りの終点連結駅となる。

昭和50年、対岸に球磨村村営の観光地「球泉洞」が出来たこともあり、JR九州熊本支社、球磨村森林組合共同で駅舎を森林館様のドーム状に新築、この地のPRを込めて、昭和63年3月から駅名も球泉洞と



図⑤ 駅ホーム



図⑥ 時刻表・切符運賃表

で観光客の駅利用は少なくなっている。本年3月までは「九州横断特急」上下2本の停車駅(図⑤)であったが、現在は普通列車上下各10本が停車

(図⑥)。来春からはD&S列車「かわせみやませみ」の運行が決まっております。この駅と球泉洞を送迎バスが結ぶ。名誉駅長は駅前商店主の川口豊美氏。以前の鮎シーズンには釣客との「百日戦争」と言われる程お店は忙しかったとのこと。また川下り船頭さんたちの「川掘り」時期には昼食で賑わったそうである。駅所在地は球磨郡球磨村大字一勝地丁1150-5、隣の白石駅から5.1km、八代起点から34.9kmに位置し、駅前を県道304号線が通る。

図⑦は、昭和48年夏と今(図⑧)の着船場付近、この写真では多くの川下り船で賑わいを見せている。図⑨は当時の川下り客専用の臨時団体ブルートレイン乗車風景。この駅周

辺は4年前、水害対策により駅周辺は1.5mほど高上げされている(図⑧)。この地点は地質学上の大断層・大坂間構造線(秩父帯と四万十帯の大断層帯)上でもあることから、

地勢的にも響きのにも、やはり「大坂間」の名称が相応しい駅であろう。

奇岩奇勝の宝庫・大坂間

球泉洞駅周辺は球磨川の奔流と併せ、駅北側には舅落岩と清正公岩、その下流には槍倒岩と槍倒ノ瀬などの天険巨岩がふんだんに見られる。加藤清正が球磨の地を「攻めるに攻め

きれぬ」と諦めて引き返したという清正公岩頂上には今でもお御堂があり、昭和20年代には相撲大会も開催された由緒ある所でもある。だが対岸の国道219号線をクルマで通過する大半の観光客に、この絶景を見せられないのは残念な限りである。

昔の絵葉書には完成したばかりの舅落トンネル、その奥には清正公岩を穿った細い道が続く。現在、清正



図⑦ 旧大坂間着船場の光景 (福井弘氏)



図⑧ 現在の旧着船場付近 (福井弘氏)



図⑨ 川下り団体列車
(昭和48年7月福井弘氏)

公岩下にはしっかりと掘りした洞門が造られ、手前の舅落トンネルの擁壁は落石覆いで



今も被災の爪痕を残す東松島市の光景

「大震災で被災した人たちに、じぎやんしたつちや現地に行つて、笑いと勇氣と元氣を届けたい」、そう決心した上杉芳野さんは五年前から「東日本立ち上げ大震災復興支援チャリティーショー」を開催した。その入場料の全てと会場での募金を持つて、芳野と愉快

な仲間達（芳野劇団）の九名は十一月十九日、人吉を早朝の七時出発した。「おどま、おとしか！（怖くて飛行機に乗りたくない）」という芳野さんをなだめて、座席に座らせて私は指定された後部座席に座った。空港を離陸して一路、宮城県は仙台空港へ。一時間五十分のフライトに芳野さんも耐え、無事に仙台の地を踏んだ。「思ったより、ぬっかね〜」。「仙台の一日目は青葉城へ行きましょ」と旅先案内人を務めてくださるあさざり町役場の早田愛一郎さんの運転

するワゴン車で青葉城へ登った。大きな城構えである。今でいう青森、岩手、宮城、福島を合わせて陸奥と言われた地域を伊達政宗公が治める。伊達正宗という人物は、それは、宮城県民が最も愛する武将なのだ。どこにいても伊達政宗のキャラクターの写真からお土産用品も賑やかだ。お城の上に護国神社があり、その隣には資料館があつて青葉城の姿を3Dの影像で見せてもらった。そこから、車で十分程のところにある今夜の宿へ着いた。

すべては、これから

天かける芳野と愉快な仲間たち —東日本大震災被災地東松島へ飛ぶ—

「立ち上げ東日本！震災復興支援チャリティーショー」実行委員 宮原信晃



図⑩ 駅周辺の昔（上）と今（下）：絵葉書左は舅落トンネル（141 m）右手は清正公岩（鍋屋本館所蔵）



があるされるが、それには近親相姦の逸話が潜むと言われている（図⑫）。

- 〈参考資料〉
- ・前掲 各駅停車「熊本県」昭和58年
 - ・前掲「くまもの駅と港」昭和58年
 - ・ウィキペディア…球泉洞駅
 - ・「肥薩線100周年・駅シリーズ」No. 10 球泉洞駅 時代と共に、平成21年3月30日 人吉新聞
 - ・JR肥薩線球泉洞駅 平成12年1月20日人吉新聞
 - ・「新・球磨子」熊本日日新聞社 平成2年10月
 - ・「新鉄道旅行案内」評論社 大正15年9月
 - ・「旅窓全書・九州各線」修道社 昭和36年
 - ・前山光則「球磨川物語」1997年葦書房
 - ・聞き書き…川口豊美氏 愛甲泰治氏 大瀬充氏

見えなくなったが、駅ホームからも数百年前の当時と変わらぬ景観が見て取れる（図⑩上下）。風光明媚なこの地は川下りは勿論、魚釣りや散策の地としても十分に楽しめる場所である。またこの地は球磨郡から告げ、葦北に抜ける境界でもある。駅の手、松本橋上流の大坂間集

落川傍には、蛇捲岩（じやまきいわ）という川下り上り舟用の通行改め所があつたとのこと（図⑪中央下）。その脇を佐敷・人吉間を結ぶ人吉街道が通る。その先の球磨川左岸には「石造尼僧」を祀った柴立姫神社があり、安産や下の病気に効能



図⑪ 川船通航改め所（蛇捲岩）



図⑫ 柴立姫神社

仙台へきてどんな料理がでるのかと、ワクワクしているところに、NHK大河ドラマ「真田丸」出演の「中原丈雄」さんのおじ様、「蓑



麦生田忠さんの歌



竹原篤子さんの舞い



村山悦子さんの腹話術

田了介」さんが見えになり夕食のお店を紹介して頂いた。

「仙台といえは牛タンでしょう」と専門店でワイワイガヤガヤと大食会会の始まりであった。牛タンの塩、タレ、味噌と舌鼓を打ち、美味しくて楽しい一日目が終わった。

さあ、二日目。この旅の目的の「東松島」へ向かう。早田さんが運転をして頂き、約一時間程で、東松島市の「野蒜駅」にある今度新しくできた代替え地に到着した。

「ひがしまつしま福幸まつり」と書か

れた看板があった。聞くところによると、この駅の下の街並みが全て津波の被害に遭ったらしく、この山を切つてこの場所を造成したようだった。

福幸祭のイベント開始宣言である。先ずチャリティーショーで集めた支援金を前田一洋代表が東松島市長に手渡し、その後あさぎり町長から預かったメッセージを早田さんが町長に代わり代読した。会場からは大きな拍手が沸き上がった。

昼前、特設会場は路上にブルーシートを敷いて頂き始まりである。

麦生田忠さんの軽やかな司会で、先ずご本人の歌「南部蟬しぐれ」を披露。竹原篤子さんの「華燭の宴」をお祝いに踊って頂き、村山悦子さんとケンちゃんの腹話術。そこに、肥後のちゃん掛け独楽を藤原宏先生が登場して独楽回し。会場の人は初めて見る独楽回しに目を丸くしている。それから賑やかな、津軽よされ〜節〜と大塚繁子さんが「知恵つ子よされ」を踊って周りのお客様は大いに盛り上がった。そこへ芳野座長が東松島市役所の六名を引き連れ綺麗な衣装に身をま

とつて登場。フラダンスなどの曲に合わせて芳野さんの踊りをマネて踊るのだ。会場は大爆笑と化す。最後に前田

一洋先生が「旅愁」を指揮して会場の皆さんと舞台上立つみんなと大合唱で締めくくった。路上での舞台ではあったが、歌や踊りに腹話術、最後に大合唱のステージは、被災された方々と一緒に、温かい風が会場を包んだ。

さて、役目を終えた私たちは、翌日仙台空港を飛び立とうとした時、空港の場内放送が流れる。「上杉芳野様、竹原篤子様、村山悦子様、大塚繁子様



藤原宏さんのちゃん掛け独楽



大塚繁子さんの踊り

急いで手続きをされ、4番ゲートにお進み下さいませ。やがて飛行機が飛び立ちます！お急ぎくださいませ」とアナウンスが流れるが……。飛び立つギリギリまで土産ものを買い込んでいたという、そんな話は、後日に致しましょう。

【みやはらのぶあき／人吉市】



復興の進み具合を窓から確認する

駄ヶ谷駅もしくは信濃町駅から徒歩5分の場所にあります。

新国立競技場は2012年に有識者会議で総工事費1千3百億円での計画承認後、デザイン・コンクルの審査結果が発表され、イギリスのザ・ハ・デイド氏の作品が最優秀賞に決定しましたが総工事費が3千億円になることが判明。再度の入札で大成建設・梓設計・隈研吾のチームによる

1千6百億円の案に決定しましたが、このことによる着工の遅れで2019年のラグビーのワールドカップでの使用ができなくなっています。

サッカーの決勝戦も行われる新国際競技場は収容人員6万8千人、総工費は2千5百億円が予想されていますが、2002年のFIFAワールドカップにおいて、国際競技場が収容人員が5万人で観客席の3分の2以

上に屋根が架設されていないため候補から外され、横浜国際総合競技場において決勝戦が行われました。横浜スタジアムの収容人員は7万人で総工費は603億円、ロンドンの競技場は収容人員8万人で635億円でした。

【かりた・よしとむ／税理士・行政書士、東京都】

倉敷便り ①

原田正史

郷・人吉球磨のことを思い出さずにはいられませんでした。

平成二十六年四月、脑梗塞となり、やむなく岡山県倉敷市へ転居してから早や一年半が経過しました。この間、なにかにつけても山紫水明の地、我が故

満九十歳、即ち卒寿を迎えます。生来、病弱な私が命永らえたのは、現代医学の力によるものであるのは勿論の事ながら、今日の生きる力の支えとなっていた

だいているのは週五日、デイサービスを受けている「オリーブ・ガーデン」という養護施設のお陰です。オリーブ・ガーデンは上田明子代表はじめ全職員の皆様が、異郷人である私に分け隔てなく真心をもつて温かく接していただいております、ありがたい限りです。

倉敷市は、人口およそ五十万の岡山

市に次ぐ県下第二位の都市です。中心街の中央部にあつて、大原美術館や柳並木の掘り割りなどがある美観地区が有名であり、来訪された方も多いと思います。岡山県は、古代に吉備の国と呼ばれ、大和の国に次ぐ重要な地域だったのです。従つて古代からの名所旧蹟が県内各地に広く存在しており、美観地区はその二つに過ぎず、美観地区を見たから岡山観光が終わったというのは正しくありません。

倉敷市を含む岡山県の瀬戸内海沿岸地帯は、対面する四国の香川県と共に典型的な地中海型の気候であつて、晴れの日が多く、雨は殆どが小雨であり、降つても地面はわずかに濡れるだけです。真冬でも霜はあまり降りず屋根瓦にうつすらと見られるだけであり、朝日が差すとすぐに消えます。十一月半ばな



のに家の庭には芝生が青々と茂り、ガザニアの黄色い花が一面に咲きほこっています。

岡山県が香川県とちがう点は、水の少ない香川県に比べ水量豊富な川が流れ、道路沿いに縦横に走る水路によって、広大な美田が養われていることです。温暖な気候によつて果実の生産も盛んであり、特に長期間にわたつて今まで見たこともない各種のブドウが食べられるのは、私にとつての大きな喜びとなっています。

ます。

病氣によつてパソコンの使用方法も忘れてしまう状態ですが、出来るかぎり倉敷だよりを続けたいと思っています。よろしく願ひいたします。

今回は、当地域の隠れキリシタンについて記述する予定です。なお私はオリーブ・ガーデンにおいて職員の方に人吉・球磨地方のことを伝えており、一人の方が来年、人吉を訪問すると言つてくださいました。これが呼び水となり、倉敷からの人吉観光が盛んになることを期待するところです。私は人吉市の認定は受けていないものの、実際の行動を伴つた真の観光親善大使だと思つています。我が故郷に幸いあらんことを願ひつ。

【はらだ・まさふみ／元人吉市文化財保護委員、倉敷市】

定吉が行く

— 9 —



© Keiichi Murakami

九州相良藩「吉組」大番頭 鳥飼 博

相良藩【吉組】の誕生

平成26年春になると、私の仕事場であるJスタには毎日定吉の姿があった。午前10時のカラクリ時計の案内前後に立ち寄り、15分程の休憩をして青井阿蘇神社へと向かう。夕方にはその日に起きた出来事を私に話し帰って行く。そのお陰と言うか、私の職場には仕事には関係の無い来訪者が日に日に増えていった。時には「鳥飼さんの職場ばつてん、仕事に関係の無か者の出入りの多なつてしもてよかとな?」と心配してくれるが、その原因は定吉自身に在ると理解していて私の出方を探ってくる。

Jスタに定吉が居ると、ピコン、ピコンとスマホから音が聞こえる。定吉に関係する内容の投稿やメッセージ

が届いた事を知らせる音だ。「定吉さん、Facebookの友達も増えたでしょ?」と尋ねると「今、1200人ぐらいばつてん、せからしゅうしてぬさん!!」と言いつつも、にこにこしながらスマホをいじっている。子供にゲーム機を与えている様なものだ。私の友達は100名をようやく超えた程度だったので、驚きながら定吉を見てみると、友達が多い分スマホに拘る時間も長い。

この年は平穏な日々が続いたせいか、定吉と色々な話をする事ができた。

定吉は、人吉球磨を愛し、人吉球磨に誇りを持っている。「こつちん者んな、人吉球磨には何んも無くて言うばつてん、こぎゃんたくしや自然や文化の継承されとつ所は他にや無かと

ジを開設しただけであった。

この月には、人吉駅跨線橋は解体され、一部は大畑駅近くの宮地嶽神社の鳥居として生まれ変わった。4月の人吉市長選挙では、37歳の松岡隼人新市長が誕生し、5月には「MOZUCAステーション868」が開業した。

1000冊は入るだろうと思われる絵本コーナーには、僅かな絵本しか並んでいなかったため、吉組ページを活用し7月には103冊の古絵本を寄贈する事ができた。

同時に、人吉駅に來られた観光客に、シャンパーニュやボルドーのワイン、コニャックやスコッチウイスキーと同じ様に、世界貿易機構(WTO)が「地理的表示に関する表示基準」として指定した球磨焼酎を知って頂くために、観光案内人ハッピーと、それぞ

ばい。みんな解かつとらんとじゃもん。自分が住んどる地域ん事もよくと知らんとばい」と嘆く。この強い想いが、観光ボランティア案内人へと歩を進めるきつかけとなったのだらうと思った。

礼節で温厚な定吉夫人にも会った。ひよんな事から、定吉夫人とは親戚筋に当たる事が判り、それを機に定吉との関係も尚更深まっていた。

平成27年正月三が日の「楼門立ち」を、定吉は例年同様に行った。声を掛けてくれる参拝客も多くなり、記念写真を申し出る参拝客も居たと嬉しそうに話してくれた。

3月には、「出来る者が、出来る時に、出来るしこ」を基本に、観光ボランティア市民グループ相良藩【吉組】



【吉組】発会式(平成27年3月)

れが気に入った酒造元の前掛けを付けてもらい、定吉と同じスタイルで記念写真撮影を行った。これが以外に評判が良く、いい思い出になったと喜ばれた。若い旅行者や人吉球磨出身者は、進んで写真を撮ってくださいと願っている。外国の方は尚更であった。更に、



人吉駅前で貸し出し用の前掛け

この活動を続けていて面白い事が判った。不思議な事に自分が着けた前掛けと同じ銘柄の焼酎を購入される方が多いという事だ。楽しかった旅行の思い出として、記録に残す一つの方策なのであろう。

球磨焼酎酒造元の前掛けを酒造元



前掛けを着けて喜ぶ観光客

から頂いたり購入したりで、現在前掛けを所有する酒造元の前掛けは全て集めた。

相良藩【吉組】の活動も、ここまですると地域お決まりの意地悪が始まった。火元は身近にあると判つても顔には出さずに頑張つてはいたものの、主宰定吉やその取り巻きはよく我慢できたものだとなつて思う。

夏になると人吉駅前広場は、照り返しにより気分が悪くなるほど暑くなった。広場に植えてある樹木もまだ小さく木陰が無いため、観光客は駅舎から出ようとしない。定吉が案内する「カラクリ時計」の説明も待合室から眺めている人が多かった。

吉組メンバーの服装は、観光案内人のハッピに蔵元の前掛け姿である。

夏場だけでも涼しい服装にしよう
と相良藩【吉組】Tシャツを作成し、

ハッピを脱いで半袖Tシャツと前掛けとした。そのTシャツの作成には、デザインを勉強していたメンバーの息に協力を仰いだ。「私も欲しい」という要望に応え、趣旨に賛同してくれた吉組メンバーを対象に、「吉組Tシャツ」を販売する事となった。このTシャツはなかなか好評で、ひとりで2〜4枚購入するメンバーも居たが、会った事もない方々からの注文も多くFacebookの効果に改めて驚かされる結果となった。Tシャツの購入者には、主宰定吉が青井阿蘇神社でお祓いを受けた、定吉と私が苦勞して作った杉板の【吉札】をプレゼントし喜ばれた。

この時に、本誌「くまがわ春秋」

に拘つておられる上村主幹や宮原編集委員にもお買い上げを頂いた。

夏にはこのTシャツ販売が呼び水となり、メンバーの交流が盛んになった。夏の終わりに相良藩【吉組】の発会式を行い、30余名のメンバーの初顔合わせが実現した。その時に主宰定吉が見せた誇らしく喜びに溢れた笑顔は、今でも鮮明に記憶している。



【吉組】Tシャツを着用しての忘年会

人吉城址のモミジが色づき始めた頃、手先の器用な方から定吉の漫画絵データをプレゼントされた。数十種の定吉の絵が作っており、一緒に「定吉シール」まで頂戴した定吉はこ機嫌であった。この漫画絵は定吉の特徴を良く捉えていて、定吉は勿論、吉組のコマーシャルには最適のグッズであった。作成していただいた方には、心から感謝申し上げたい。

勿論、その年の忘年会も当然ながら賑わった。吉組メンバーは多士済々であり、特に女性陣の活躍には目を見張るものがある。初の忘年会において、宴会部長は女性二人と決まってしまったほどである。この二人のお陰で、平成27年も尚更よい年の瀬となった。

【とりかい・ひろし／人吉市】

くまがわすじの考古地誌

(4)

球磨川筋の弥生時代④

熊本県立装飾古墳館長 木崎康弘

(NO.165)

大久保ムラから見えてくること

北久保A～C遺跡で見つかった亀ノ甲式土器は、球磨での水稻栽培の始まりを探る上で、重要な遺物だ、と思われてならない。しかも、その近くには、細形銅剣が埋設された場所（槍掛松遺跡）もあるから、とても興味深いのである。要するに、大久保遺跡群の発掘は、球磨で水稻栽培が始まった背景、球磨に細形銅剣が持ち込まれた背景などなど、「くまがわすじの考古地誌」にとっては、重要な問題を炙り出してくれるものではないだろうか。

『球磨の考古地誌Ⅱ』一六一の「細形銅剣の、来た時・入った道（二）」で、「（細形銅剣を）持ち込んだのは、亀

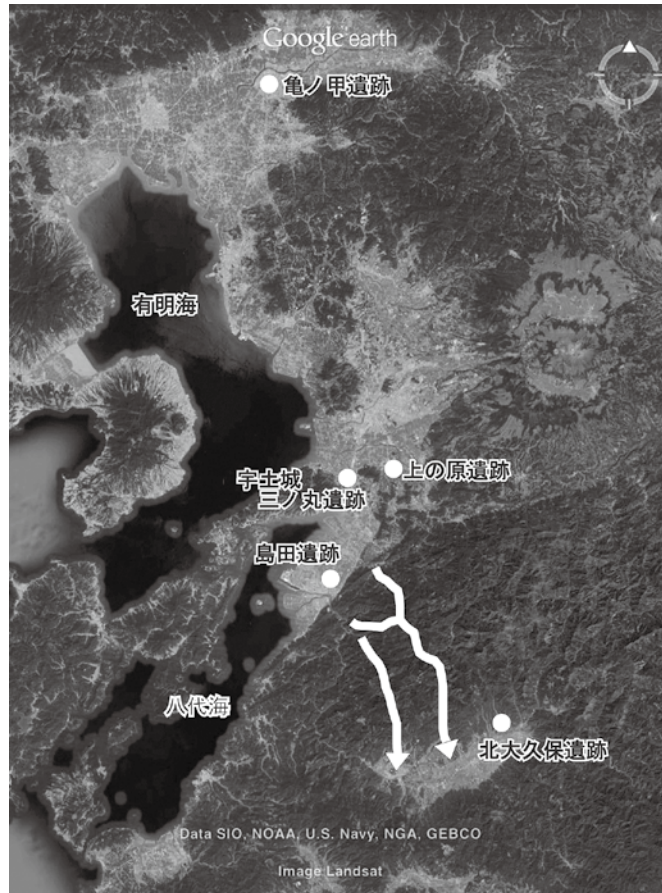
ノ甲式土器を持った人々以外には考えられない」と書いた。そして、彼らは、「かくして（中略）九州山地を越えて五木を通過して高原台地に入ったのではないか。その後、大久保台地の一角にムラを構えた」とした。そのムラこそ、北久保ムラではなかったろうか。しかも、ムラは、容易に水田に下りて行けるところにあったのである（本連載三）。これを水稻栽培と関連付けない方がおかしいのではないか。もしかしたら、球磨での水稻耕作の始まりは、弥生時代前期末から中期初頭にかけての亀ノ甲式土器の頃ということになるのではないか、と思われてならない

のである。

確かにこれまで、球磨でいつ水稻栽培が始まったのかが問題にされてこなかった。それは、前期の土器が見つかった。

ていないからだったが、そこに姿を現したのが、亀ノ甲式土器の頃の竪穴式住居跡であり、ムラの跡だ。これを機会に、球磨における水稻栽培の起源を積

極的に議論してもよさそう。



写真①亀ノ甲式土器出土の主な遺跡と伝播ルート

熊本平野周辺では、宇土市の宇土城三ノ丸遺跡（図①）や熊本市南区城南町の上の原遺跡などがあり、八代平野では、八代市の島田遺跡があった。こうしたことを踏まえて、本連載で評価したのが、北大久保A～C遺跡の亀ノ甲式土器（図②・③）から見える、その土器を携えた人々の入植の有様だった。「球磨に入るためには、（中略）海路で直接八代に到った人々が入った、海路なり陸路なりして熊本平野にやって来た人々が入ったりできる大通峠越えが現実的」と。



写真② 北大久保ムラとその周辺

つのことだったかは分からないものの、ムラの西方、約一キロメートルのところに宝物の銅剣を埋めたのだった（写真②）。そこは水田を見下ろせる台地の縁の近く。そこは、皆を率いて北大久保ムラにやってきた首長らを葬った墓だったのか。それとも水田とムラの安寧を祈った祭りの場だったのか。これからも尽きることのない想像は、大久保遺跡群の発掘がもたらしてくれた成果のお陰である。

（つづく）

文献『大久保遺跡群』（多良木町教育委員会、二〇一四年）。

Kizetaの考古いぼれ話

考古学エレジー③

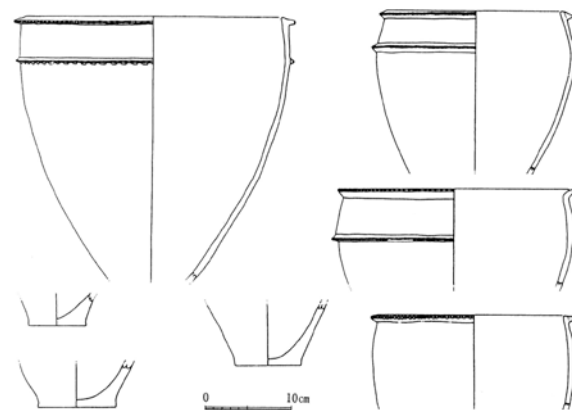
♪雪の山野に日は落ちて／月の光に
照らされた／遺跡の白け、清けきは／
あの子の面を偲ばせる／ああ、偲ばせ
る

『考古学エレジー』三番の作詞は、
宮崎大学名誉教授の柳沢一男さんでし
た。九州を代表する古墳時代研究者の
一人です。

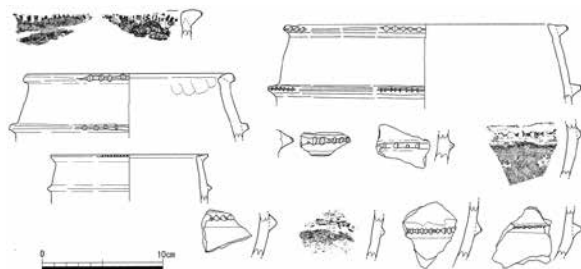
若き考古学徒が集う発掘現場。その
場には男子もいれば、女子もいました。
そんな現場のトレンチの中で、恋の花
咲くこともあり、こんな音頭がこだま
することもありましたよ。

「♪青い月夜のトレンチで／花咲く恋
の美しさ／ソレ！ 美しさ」（我が明
治大学考古学専攻生の愛唱歌『考古学
音頭』）

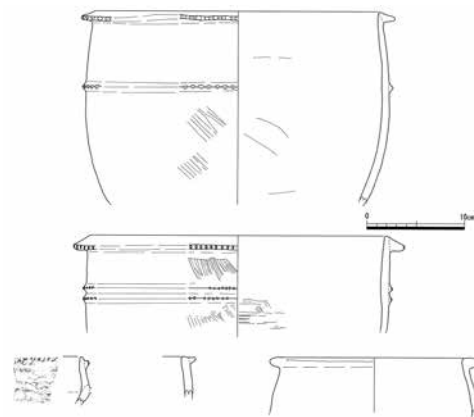
熊本平野では、例えば熊本市の江津湖底遺跡があるように、前期の初期から水稻栽培が始まっていた、と考えられている。それは八代平野でも十分に想定できることである。これらの地域では、前期から水稻栽培が行われていたのである。そうならば、球磨に栽植した亀ノ甲式土器を持つ人々が水稻栽培技術を習得していたことは、容易



図①宇土城三ノ丸遺跡出土の亀ノ甲式土器



図②北大久保A遺跡出土の亀ノ甲式土器



図③北大久保B遺跡出土の亀ノ甲式土器

に想像できるのではあるまいか。しかも、球磨での出土例は、北大久保AⅠC遺跡のようなまとまった量ではないものの、あさぎり町の本目遺跡^{もとめ}などにもある。おそらく、球磨の各所で、亀ノ甲式土器を持った人々が水稻栽培

きるのである。

北大久保ムラの人々は、細形銅剣を大切な宝物として持参して、大久保台地に移り住んだのだらう。彼らが最初に始めたことは、牛繰川うしくがわや赤木川あかぎに堰を造り、用水路ようすゐろを開削かいさくし、水田を整えることだったらう。そして、い

「笑評」

——前田一洋著

『極々最近冥界事情』

椎葉直美

魂は死んだらどこへ向かうのか。私たちは死後の世界を見たことがない。だから恐怖心を抱く。閻魔様は怖いのか。三途の川は深いのか。この本を読んでいると、パソコンを開けば今流行りのひかり通信であの世とつながりそうなの、そんな気がしてくる。『極々最近冥界事情』では、



バチかぶり笑説『極々最近冥界事情』
前田一洋・著 上中万五郎・絵
2016年11月3日 人吉中央出版社

死んだあの人が、あちらの世界で今どのような生活をしていて？いるのかとか、三途の川はどのようにして渡るのかとか、閻魔様の安否や地獄の鬼事情等々、今知りたい冥界情報が手に取るように見えてくる。その上、著者の手により地獄が中改革なされているから、特に男性にとっては、目が心になるお・た・の・し・みが待っている。女である私が読むと、男性の本望とやらを垣間見た気がして、夫の顔がまともに見られない(笑)。

それにしても人間とは途方もなく欲深い生き物だな。地位や名譽、お金に快楽が大好きで、死んで魂だけになってもそれらの欲を捨てきれず、とうとうあちらの世界まで人間勝手に変革してしまつた。そんなことあり得ない。あり得ないけど、自己中間人間がああ世で集えば、無きにも非ず。そのあり様が球磨弁六調子前田節で滑稽に描

かれているのだが、ただ面白いだけではなく、人の心の貧しさを厳しく優しく静かに切り裁くところに、人間性豊かな著者の魅力を感じる。

お葬式でのお経の意味は？ 四十九日って何？ 法要は何のため？ お墓や仏壇に生花を手向け、ロウソクに火を灯し、お香をたく理由。「常識」だと思われている事を知らない人は多い。「知らない」というよりも「教えてもらえていない」のだと私は思うのだが、著者はそういう人達を決して批判するのではなく、知る必要がある事に気付かせ、それなら自分で調べてみようという気持ちを起こさせる事の上手さ。著者の押し付けがましくない教え方は、今の若者を象徴するゆとり世代にも受け入れられると思うのだが…流暢な球磨弁が難しいから読まないって？ 生まれも育ちも鹿児島がこの私が読めたのに？ え？ それで球磨弁は解読できたのかって？ 何となく雰囲気理解しようとして読んでみたけど、トホホ…舌は絡むし頭がもつれるので、簡単に解読できるものではないですね。その代わり方言の懐かしさに触れ、私もたまにはかごんま弁

で喋ってみようかな、そんな気持ちになりましたがよ。

鹿児島といえば、墓地の花の美しさはご存知ですか？ 日本一お墓参りをする県と言われています。その理由は目上の人を敬う精神が強くて残っているからとか。ご先祖様の恩を忘れず手を合わせる親の姿を見てきた子供達は、敬う気持ちを自ずと学び、命を尊ぶ。自分や他人の命を尊重できる人になれば、自殺や殺人は起こらないのではないかと。著者は、自殺した魂の行き先についても触れているが、読んでみれば恐ろしくして、生きている方が極楽のように思えてくる。一人でも多くの思い悩める命が救われますように、願いを込めて書かせてもらおう。

「冥途に絶望はない。仏様のたなごころの中で希望に満ちた毎日が送られる。ただ往つた先を極楽と受け止めるか、地獄だと思ふかで、その居心地が大きく違ってくる。」と著者は言う(120頁)。それは冥途に限らず、今私達が生きているこの瞬間にも言える事。

生きるも逝くも楽しゅう往こう。

【しいば・なおみ／団体職員、あさぎり町】

「冬至十日前」

山下完二

熊本交通センター発4時半の高速バスに乗った。市内を通過する間は東に向いて走るし、ビルや広告塔や街路樹などで空もよく見えないが、インターチェンジから高速道に入ると下り線のバスは南に向かう。

高速道から見える西の空は久し振りに晴れて美しい夕焼けだった。少し離れた席から、「わあー、夕日のきれいか」と子供の声。引き続いて母親らしい人の言葉が聞こえてきた。「今日は冬至だったね。一年で一番お昼の時間が短いだよ。朝一番遅く日が出

て、夕方は一番早く沈むんだよ。」

ここで、皆さんにクイズを出そう。母親の言葉は正しい【○】、一部間違っている【△】、全部間違っている【×】、わからない【？】。あなたはどの記号を付ける？ 皆さんは『冬至』について、いつ、どのように、誰から学ばれたか思い出せる？ 私は、学んだのは思い出せないが、たぶん小学校高学年の頃、担任の先生から、冒頭の母親の言葉のように教えられたように思う。

しかし、生活実感としては、バスの中の母親らしき人の言葉とは違うように感じていた。終戦をはさんで旧制中学から新制高校卒業まで六年間も汽車通学をしたので、何となく違うねと体感から思っていた。そんな時父が夕方農作業の帰り道で、『冬至十日前』という言葉が有る』と言った。冬至より十日ほど前の方が早く日が暮れると言うのだ。ちよつと驚きの言葉だった。学校の先生から教えられたのと違う。では一番早く日が沈むのはいつだろう。でも、実際には冬至の頃にはもう夕方が少し明るいような感じは持っていた。

日の出については、一月十日前後の始業式頃、冬至も過ぎて二週間以上にもなるのに、いつまでも夜が明けない、霧の所為かななんて考えてい

た。日の出が一番遅いのはいつなんだろう。しかし、疑問は持ったまま調べるという事もなく過ぎてきた。しかし、事実は、生活実感の方が当たっていた。

新聞の暦欄を調べて毎日のを表に書き出してみた。日没は十日どころではなく、熊本では、十一月の二十八日から十二月十一日の十四日間も、最も早い十七時（午後五時）十一分の日没である。冬至の日の日没は二七時一五分と記録されているから、四分も遅くなっている。日脚が伸び始めているのだ。

日の出の方は冬至を過ぎてもまだ遅くなり、一月二日から十六日まで七時二十分が続き、十七日にやっと七時十九分と復活が始まる。もうこの頃になると夕方は毎日一分ずつ遅く日



が沈むようになり、冬至の日の日没から比べると二十四分も遅くなっている、寒さは変わっていないけれども、光で春が感じられる。

この文の表題「冬至十日前」に「・・・が最も日暮れが早い」とか「・・・から日が戻る」とか「・・・から日脚が伸び始める」といった言葉を付けて、イグサ農家や麦作り農家の人た

ち山林業の人達は作業を急がせたとの事だ。暗くなつて農機具や衣類を置いた所が分らなくなったり、帰り路も危険だから、注意を促したという。

これらの人たちは、自然相手に仕事をしているので微妙な時間の変化なども敏感にとらえていたようだ。それなのに多くの人が、冬至の日が最も遅く日が出て、最も早く沈むと思っている。冒頭のクイズは【△】が正解で、母親の『『冬至』だから一年のうちで一番昼の時間が短い』は正しいが後半の言葉は誤りである。

大手の新聞には毎日、日の出・日の入りや月齢等が、暦欄に小さく載せられているが、それさえ知らない人が多いのではないだろうか。

私は新聞を一年分日の出日の入り時

45 くまがわ春秋 Vol.9 2016.12.9 くまがわ春秋 Vol.9 2016.12.9 44



暮らししてきたそうです。
お正月はおせち料理、雑煮。1月
7日(人日)は七草粥。2月3日(節

分)は福豆、恵方巻。3月17~23日(彼
岸)は牡丹餅。7月30日(土曜の丑
の日)はうなぎ。8月15日(盆)は

精進料理。9月の彼岸はおは
ぎ。11月15日(七五三)は千
歳飴。12月21日(冬至)はか
ぼちゃ。大晦日は蕎麦。
主な行事料理をあげてみま
したが、今でもちゃんと残って
いますね。

最近では、コンビニや、大手
食品メーカーが、恵方巻や七
草などを展開しています。とて
も良いことだと思えますが、本
来、行事料理というのは、買っ
て食べるものではないと思いま
す。

おばあちゃんやお母さんか
ら、伝えられていくものだと



【うらかわ・はるか/人吉市「さんぽ
カフェオーナー」】



今年も師走へ入りました。
今年一年。熊本にとってはあつとい
う間でしたね。皆様はどんな一年でし
たか？

今回は旧暦(太陰暦)と食文化に

についてお話し致します。

新暦は、地球が太陽の周りを一周
するのにかかる時間を1年(365
日)として数えます。

旧暦は、月の満ち欠けの周期を1
か月とし、1年を354として数え
ます。

なので、新暦と旧暦はずれているん
ですね。どんどんずれていかないう
に、3年に1度の割合で「閏月」を
加え、暦の大きなずれを解消してい
ます。

日本は、明治5年まで、国暦は旧暦
(太陰暦)でした。

旧暦では、春は1月にスタートし、
立春の頃に元日が巡ってきます。

真冬の1月に届く年賀状で、「新春」
や「迎春」と書くのは、旧暦を取り
入れたもので、旧暦に基づく表現は、

今でも私たちの生活に深く関わって
います。

日本人の知恵として、「二十四節気」
というものがあります。

これは、1年間の太陽の軌道をも
とに約15日ずつ、24に分けたものです。

日照時間が最も長い「夏至」と最
も短い「冬至」に分けます。その間に
「立春、立夏、立秋、立冬」が入
ります。さらに3等分して24に分け
られます。

それぞれの暦には、その季節に沿っ
たものを合わせて行事食という食文
化があります。昔の人はそれを「ご
馳走」とよび、それぞれの節句を祝
いました。

節句(行事)は、「晴れ(ハレ)の日」
といい、日常のことを「裏(ケ)の日」
といい、節句とは、特別な日として

私は思います。

文化の発展目覚ましく、食の情報
に惑わされそうなることもあります、
日本人の「馳走」の心。よき食材
を求めて走り回る、と書きます。昔
の人の心も含めて「文化」だと思い
ます。心を受け継ぎ、伝えていけたら
と思います。

団塊の世代の「おくんち」

益田啓三

江戸時代のおくんちは「重陽の節句」といい、9月9日に催される重要な年中行事のひとつであった。

相良の殿様と重臣たちが「青井大明神」へ赴き、厳かに「三献之儀」を奉じ郷土の繁栄や安寧を願っている。ところで庶民はどのようにおくんちを祝ったのであろうか？ 明治期の日記にはよか着物にうつつて出かけている。そしてやっぱり参拝後のグルメや相撲などを楽しんだようである。

私の子供の頃のおくんちは「早い

もん勝ちの生き残り」といった様相である。

昭和30年代に小学生であった我々はまさに団塊の世代の中にあり町内に100数十人もの生徒が居てひとつのお御輿に全員が出れるはずも



昭和32年ごろのおくんち祭り
(青井阿蘇神社所蔵)

なく、4年生以上の者しか参加できなかつたのである。3年生以下はただ我慢して見ているだけであつたが、中にはどうしても加えてほしくてぐずる子もいたがそこは上級生の威厳である、「でけん！」の一言で黙らせた。当時は子供たちの中でちゃんと上下関係が築かれており年

長者には従順にしたがつたものである。親たちは生活に大変で子供の日常まで目が行き届くはずもなく、そこはよくしたもので子供らの中で社会秩序が築かれており、又その地域の人々で子供たちを見守っていた社会であつた。

我々「新町」はいつも老神神社に

集合し青井さんへ行き神幸行列に参加したが、私はどちらの神様にもお参りした記憶がない。今にして思えばまことにご無礼なことである。当時はただお御輿に参加できるのがうれしく誇らしいだけであり、昼めの「おにぎり2個、たくわん数切れ、ちくわ一本」が食いたいただけであつた。なぜ

カス、小屋掛け、ゾウ、ライオン、トラ、空中ブランコ、へび女、ろくろ首、覗き見、人々の歓声、ジンの響き、親の脅し文句「サーカスに売り飛ばすぞ」、楽しさと怖さと刹那さが入り混じった中川原であつた。

ふせ（継ぎ）のしてある衣服、靴下、いぼ、鼻たれ、かさつぱち、皆がまだ貧しかった時代であつたが大勢の子供たちの喜々とした姿は日本の高度成長前にあつて将来に希望が見えかけた活力ある時代であつた。鼻の下に線路が走り袖がテカテカに光っている坊主頭の小僧はどこに行つたのだろう。



おくんち祭りでの私（左）と弟

かあの昼めしの美味かつたことだけはよく覚えていて。今の子なら「ぜーして」と言うに違いない。おまけはサーカスの割引券。

中川原、サー

【ますだ・けいぞう／元人吉市

文化財保護委員、人吉市】

荒田観音堂（錦町木上）の復活を望む

溝下昌美

はじめに

相良三十三観音めぐりの解説書については、上村重次氏の「相良三十三所観音霊場巡礼その歴史をたずねる」『人吉文化』第四六号（一九六五年）所収（以下「巡礼」と略）、高田素次氏他『相良三十三観音めぐり』人吉球磨文化財保護委員連絡協議会（一九七七年）（以下「観音めぐり」と略）が知られていた。

また、昨年は熊本県立美術館特別展では、中山観音の聖観音像（現在、同所の四天王像とともに県指定）等も展示され、好評を博した。それに伴い、各所の観音像の調査が行われ、観音像の造立年代も変化してきている。その後、岐部明廣氏の日本遺産『相良三十三観音

巡礼』も刊行された。

筆者の疑問は現在、三十三観音でなく、三十五方所観音札所あることへの疑問であったが、ほか、御詠歌のこと、要望等を書いてみたい。

一 現在の三十五方所観音への疑問

これに答えてくれるのが、「観音めぐり」の三五ページの次のくだりである。

「従来は、第十九番の札所は今の木上の荒田大王社横の福田寺だったのですが、いつからか福田寺観音ははずされて、第二十一番札所であった内山観音が今では第十九番札所になっています」

なんと、福田寺観音（今の荒田観音堂）は札所であったのである。御詠歌もあるのである。武親の御詠歌は「入り得ては よしあしかきのへだてなし 法の教えはみちかわれども」と、きのへ（木上）が詠いこまれている。

また、「観音めぐり」は四〇ページに

「上手観音は球磨川の川瀬の橋の北際にあり、従来は

札所には入っていないかったのですが、十九番の福田寺観音がはずされ、第二十一番の内山観音が第十九番となり、二十二番の永峰観音が二十一番になったために、いつ頃から二十二番に加えられたのです。」とし、「御詠歌はありませんので、二十一番のでも詠ってもらわねばなりませんまい。」と記している。

札所一覧「相良三十三観音めぐり」20、21ページによる

順	札所名	所在地	現在地
壱番	清水	人吉	人吉市
二番	中尾	同所	人吉市
三番	藍田	矢瀬津留	人吉市
四番	三日原	十越	人吉市
五番	渡村	船戸	球磨村
六番	原田	普門院	人吉市
七番	同所	石室	人吉市
八番	湯之元	薩摩瀬	人吉市
九番	村山	観連寺	人吉市
十番	瀬原	人吉町	人吉市
十一番	鬼木	大村	人吉市
十二番	合戦峯	同所山田内	山江村
十三番	観音寺	新馬場	人吉市
十四番	梁瀬	安壽寺	相良村
十五番	養毛	鐘林寺	相良村
十六番	深水	長命寺	相良村
十七番	河邊	（記載なし）	相良村
十八番	同所	長樂寺	相良村
十九番	木上	福田寺	錦町（荒田観音）
二十番	深田	慈眼庵	あさぎり町
二十一番	同所	内山	あさぎり町
二十二番	須恵	石坂	あさぎり町
二十三番	栖山	多良木	多良木町
二十四番	湯前	南朝寺	湯前町
二十五番	普門寺御本地堂円通入円通		湯前町
二十六番	町	湯前	湯前町
二十七番	久米	法陀寺	湯前町
二十八番	奥野	中山	多良木町
二十九番	宮原	龍泉寺	あさぎり町
三十番	上村	（記載なし）	あさぎり町
三十一番	一武	一乗寺	錦町
三十二番	新宮寺六観音三十三身		錦町
三十三番	赤池	（記載なし）	人吉市

以上のことから、荒田観音堂が近年、はずされ、上手観音、その後、上手と同じく現在の二十二番、覚井観音が追加されている。この両札所とも御詠歌は存在していない。また、「観音めぐり」の御詠歌から地名・札所名一覧表を上げておく。

二 生善院観音

生善院観音については、上村氏の『巡礼』が指摘するように、「寛政六年（一七九四）の詠歌には生善院観音は札所に入っていないのを見ると、南朝寺観音が廃絶してから、生善院観音を札所にするようになったと考えられる。」としている。

思うに、生善院観音堂は寛永二年、藩直轄による造営であり、別格であるので、井口武親は札所には加えなかったのではないかと思うのだが。いかがであろうか。

実は現在の生善院観音の御詠歌が、何と、三十三観音札所の本家本元、西国三十三観音札所の二十四番・中山観音（宝塚市）と同じであることに二年前、気づいた。

つまり、現在の三十五カ所観音は、湯前の南朝寺観音が廃絶し、近年に荒田観音をはずし、あさぎり町の上手観音・覚井観音、二十四番である水上村の生善院観音と龍泉寺観音を追加したために三十五カ所観音札所になったと考えられる。

私見であるが、以上、三カ所の札所については、御詠

歌を公募したらいかがであろうか。今、盛んに使用されている三十三観音宝印帳に御詠歌がないのもさびしいような気がするのだが。

三 荒田観音堂

なお現在、番外の荒田観音堂である。平成二十八年、錦町では、毎月の町文化財保護委員会の現地調査の下、文化財冊子が刊行され、数件の町文化財指定も行われた。荒田観音と同所に鎮座する荒田大王社本殿も町指定を受けた。

この文化財としては、従来、堂内の釈迦如来坐像が、昭和五十七年、九州大学が行った美術調査により、像内から「保延七年」（一二四二）の墨書が確認されて、県指定を受けていた。その後、県立美術館の有木芳隆氏によるご指導の下、県、町の補助事業として、平成二十五年、保存修理が終了した。しかし、ほかにも、大王社内の鎌倉時代の神像などが県立美術館の調査により知られていた。

当観音堂の仏像について、従来の見解は、上村重次

氏の『九州相良の寺院資料』では、「聖観音像は室町末期、釈迦像は室町初期」という見解であった。聖観音像について、塩澤寛樹氏は鎌倉時代造立とし、本年六月に町教委のご支援の下、元熊本県立美術館の学芸員大倉隆二氏らと筆者が行った調査でも鎌倉時代の作とした。

また、横に安置される毘沙門天像は平安時代後期の作とされた。また、観音堂自体は大王神社本殿と近い建立ではなからうか。

「平川文書」（県指定）にあるように、ここは神宮寺として、荒田寺が建立され、荒田寺は大王社も統括してい

たと推測される。

その県指定の釈迦像には保延七年（一二四二）の墨書とともに、「天台僧林与」の墨書も存在するのである。そして、ここ大王神社、観音堂、薬師堂には平安時代からの優れた文化財が今もなお、残存しているといわねばならない。

また、ここ荒田観音堂は彼岸には接待が行われているのである。やはりこれはできれば、相良三十三観音めぐり協議会へ入会され、復活されるべきではと、誠に僭越ながら、ご意見申し上げる次第である。

相良三十三観音めぐり関係ではここ三十年程、ハード、ソフト事業にと、多くの公費が投入されつづけてきた。ここは今、球磨郡で唯一、札所がない五木村の観音堂も僭越ながら、どこか、観音めぐり協議会へ入会されたらいかがであろうか。

以上、勘違いや的外れもあるかと思うが、関係各位にご海容をお願いし、稿を閉じたい。

【みぞした・まさみ／地域史研究家、球磨郡湯前町】



荒田観音堂（錦町木上）

「牛使いの少年」原作 「虹の谷」のフィルム発見

上田精一



映画「虹の谷」の1シーン（1954年製作・'57年公開）

「浩之ちゃん『虹の谷』ば捜してみ
てくれんや。たしか、村に一本は贈つ
てあると聞いたことがあつた。勝
清おじさんから——」

当時、相良村教育委員会の社会教
育課に勤務していた従弟の池井浩之
くん（74）にそう頼んだのは一九八
八年の夏の頃だった。数ヶ月後、浩之
くんから電話が入った。

「精ちゃん、捜しとったフィルム（16
ミリ）の出できたばい。教育委員会
の倉庫にちゃんと保存してあつた。
ばつてんフィルムにやえろうカビの生

えとつこたつで映つかどうかしらん。
見にきてみらんね」

当時、相良北中に勤めていた私は
喜び勇んで出かけた。見てみるとた
しかにフィルムの縁に白っぽく、カビ
のようなものがこびりついている。

「よし。これ預かってよからうか。
熊本映画センターに持ち込んでチェッ
クしてもらうけん」

貴重なフィルムとあつて映画セン
ターの木村雄一くんは慎重の上にも慎
重にクリーニング（カビなどの除去作
業）やパーフォレーション（フィルムの
ふちの穴）の修復作業を無償でやつて
くれた。

チェックが終わったという電話を受
けて私は矢も楯もたまらず熊本へ出
向き、映画センター事務所での試写
に臨んだのだ。音も映像もみごと

であつた。私は身体の震えを覚えつつ
「勝清おじさん」の笑顔を思い出し
ていた。

「ありがとう木村くん、フィルムを
再生してくれて感謝あるのみだ。映
文協総会で試写会ができるよう運営
委員会に提案してみるけん、そのとき
は映写ば頼むぞ」と彼の太い手を握
りしめて喜んだのを昨日のこ
このように思い出す。

当時の浩之くんの上司、梅
山^{あかし}究教育長（故人）はこの
フィルム発見をことのほか喜
び、映文協総会での上映を快
諾していただいた。

熊日はこのことを「幻の映
画 20年ぶり日の目」の見出
しで相良村教育委員会に保
存されていたこと、十二月一



フィルムの発見を報じる熊本日日新聞(1988.11.28付)



主演の月田昌也（左）とその右、左幸子

日に映文協総会で上映されることな
ど大きく報道した。この記事の反響
は予想以上で、「観たい」という問い
合わせが相次いだ。総会に先立つ上
映会は盛況だった。

人吉新聞は当日の観客、特に当時
を知る人々の感想を特集した。題して
「ふるさといっぱい『虹の谷』の大

見出しと小見出しに「あつ、母の唄だ！
」「思い出したロケの世話」などとあ
る。感想のいくつかを転載してみよう。
・「当時、人吉営林署在職中で『虹の
谷』ロケ隊の世話役を命ぜられ国
有林関係の現場について回りまし
た。当時を思い出し懐かしい限り
です」（人吉市・河野嘉夫）

柳人があじわう漱石俳句

— ⑨ —

いわさき楊子



天草の後ろに寒き入口かな

(漱石31歳)

風や海に夕日を吹き落す

(漱石29歳)

暮れもおしせまつた29日に、五高教師同僚の山川信次郎と小天温泉への旅をしている。新屋敷にあつた熊本で3番目の家から23kmの徒歩の旅だった。この旅のちに小説『草枕』の土台となった。小天の蜜柑山から天草島に沈む美しい冬の夕日を見たのだろう。

このころになると自然描写の俳句然とした句が多くなる。柳人としてはもひとつ物足りないのはいしたしかたない。

後悔は展望台に立ったとき 楊子

天草の夕日を詠んだ次の句もある。



漱石が「わが墓」と題して描いた小天温泉からの前田家墓所の眺め

大橋が架かり海峡で哭けず 楊子

【いわさき楊子／川柳誌「裸木」編集人、熊本市】

・「昭和二十九年秋ごろ、私が小学四年の時、球磨村神瀬、蔵谷の段の峠で撮影されたと記憶しています。牛山師に親父が出演し、非常になつかしく思っています」（球磨村・蔵谷鉄男）

・「二十数年ぶりに母達が唄ったひえつき節を聞いてとてもなつかしく思い



公開当時の熊日広告（57.5.1）。のちに「虹の谷」に改題。人吉・富士館、免田・大丸にて上映

ました。母が聞けばとても喜んだ事と思います」（錦町・棕田クニ子）

観客のほとんどが上映後のアンケートに答えてくれ、感動の波紋は予想以上であった。

映文協は翌年の第二回ひとよし映画祭で「ふるさと」（監督・神山征二郎、主演・加藤嘉）と、併せて「虹の谷」を上映。ゲストに加藤嘉の未亡人、中村雅子さん（女優）と勝清の長女、小山直枝さん（当時、相良村教育委員長）を招いた。直枝は私の母の従妹で、母たちが「みいちゃん」の愛称で呼んでいたので私も「みいちゃん」で通した。「わが父」と題してみいちゃんは切々と亡き父を語った。

「父、勝清は球磨の山にかかる虹を渡るにふさわしい男です。父は今も四季を彩る球磨の山々を飛翔しているの

ではないかと思っています。『勝清鳥』になつて——」と前置きし「この物語には父と私の思い出がいっぱいつまっています」とも語った。

フィルムをCDにして永久保存のきっかけを作った梅山教育長のことが蘇ってくる。

「もう二度とこぎゃん映画は撮れんだろうなあ。まず頑丈なコッテ牛がおらんもん。営林署の軽便鉄道もなかし、あの迫力満点の『鉄砲ぜき』も貴重な映像ばい。高度経済成長の波に洗われる前の球磨の山村の暮らしを証言する貴重な記録映画ばい。大切にせにゃー」

目を細めて語る梅山さんが無性になつかしい。

【うえだ・せいいち／人吉映画センター代表、人吉市】

莊嚴寺をあるく

森山 学



写真① 莊嚴寺本堂

元和五（一六一九）年の地震により八代・麦島城が倒壊したのち、当時の八代城主・加藤正方は、現在の松江の地に八代城を移転する（元和八〇一六二二）。この際、萩原堤から球磨川下流へ向けて、松江城下を囲いこむように櫓塘、前川堤、潮塘と長大な堤防を築く。

櫓塘と前川堤は、球磨川の支流・前川に沿っている。この前川自体、正方が開いたものと伝えられている。現在、この前川上流は暗渠となり、野上雨水排水路として第二の人生を歩

んでいる。一方、正方後に八代に入城した細川三斎が最初に開いた現在の前川は、かつては新川とよばれていた。さて、この前川堤の一本北側の旧紺屋町の通りには、本成寺、莊嚴寺、浄信寺と寺院が並ぶ。このうち、今回は雲谷山莊嚴寺を紹介したい。

莊嚴寺は、坂本町今泉に寛喜元（一二二九）年に創建された浄土宗寺院であったが、相良爲統の八代進出時（文明一六年〇一四八六）に菩提寺に取り上げられ、時宗に改め、今の古麓町に移転している。莊嚴寺は相良氏の「八代日記」にもしばしば記述されおり、木下潔氏によれば、相良氏の迎賓館的役割を果たしていたようである。

天正九（一五八二）年、相良氏が八代から退いたあと、莊嚴寺は衰退

期を経て、加藤時代には浄土宗に復し麦島城下に移転、さらに地震後には現在地の松江城下に再度移転する。

境内南の門をくぐると、左斜め方向に本堂がある（写真①）。その屋根は寄棟造である。ただ上下二段になっている。下段の屋根はスカートのようであり、ひさしのようなものである。これを兜の下に垂れているところと見立て、しころ屋根とよぶ。

しころ屋根の寺院は、寛文八（一六六八）年以降の江戸時代に全国各地に多く建てられている。というのも、この年、いわゆる寛文八年令が發布されているからである。これは建物の梁間を三間以内とし、一間半のひさしであれば両側に加えてもよい、という内容であった。これを受けて、三間分にかかる屋根と、その周囲をめぐる

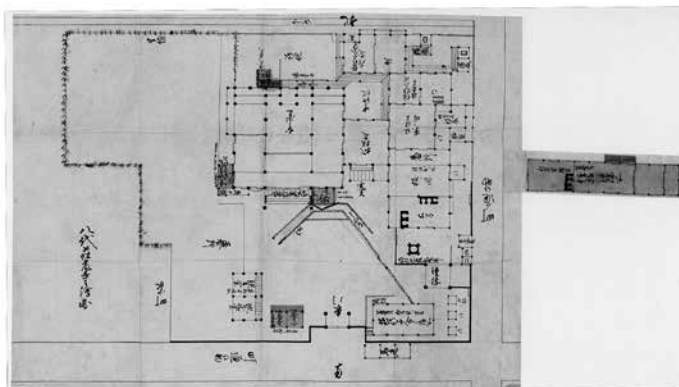
ひさし、という構成で屋根をかけるようになったからである。内部に入れば、しころ屋根の下は決してひさしではなく、身舎であることがわかるのだが。

莊嚴寺も隣接する本成寺も、また八代市内の多くの寺院がこのしころ屋根である。屋根を見るだけで、八代には近世寺院が豊富だということが分かる。

莊嚴寺の移転当初は、「莊嚴寺諸記録」によれば「草堂」であったとあり、少なくとも寛文八年までの半世紀ほどが草堂時代だったと言える。

ところで「永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ」に、莊嚴寺の絵図が掲載されている（図①）。これは寛政七（一七九五）年に遊行上人が莊嚴寺を訪問した際に描いたものと考えられている。この絵図

と現在の建物を見比べてみると、いくつか異なる点がある。たとえば絵図ではふすまが描かれている場所に、現在は鴨居も敷居もないなど。そこで柱



図① 八代町 莊嚴寺絵図（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編：細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅰ，吉川弘文館，2011，p.153 所載）

など現存の部材をよく見ていくと、かつて鴨居があった場所の柱にほぞ穴が残されている。物的証拠である。こうした痕跡を確かめていくと、なるほど、現在の建物は、遊行上人訪問時の建物が改修されたものであることがわかる。

寛文八年令後に建設された建物が、寛政七年に記録され、そして現在まで伝わっているということである。

ここで二つの疑問が生まれる。遊行上人は、諸国を巡歴した時宗の代々の指導者のことである。遊行上人はこの絵図を描いた時以外にも莊嚴寺を宿坊としている。ところが麦島城下時代以降にはすでに浄土宗に復しているはずである。

絵図にも本堂正面に「賦札」と記された切妻屋根の設備が描かれている。

る。これは遊行上人が御賦算する念仏札に関わるものと考えられる。

さらに、境内角には「遊行上人」と記されている堂が描かれている。こゝは一九七九（昭和五四）年まで「天神堂」が建っていたが、現在は駐車場となつている。この取り壊された天神堂が、遊行上人の堂である。「雲谷山莊嚴寺鎮守天神縁起」には、相良時代、古麓城に巡歴した遊行上人の奉持していた天神像によって、雷が収まったことを受け、以来相良氏が守護神にしたと伝えている。

浄土宗・莊嚴寺は、相良時代の時宗・莊嚴寺を継承するものであり、相良氏菩提所としての側面も継承してきたことが分かる。

その痕跡は本堂正面に飾られているかえまた墓股の梅鉢紋にみられる（写真

②）。もちろん、梅鉢紋は天満宮の神紋である。この部材は天神堂の部材を保存展示したものである。

さらに本堂内部に入れば、入側縁の正面中央に、ふたたび梅鉢紋の欄間が見られる。この欄間は松、竹の透かし彫りとセットになっており松竹

梅を表現している（写真③）。

間取りも浄土宗の典型を踏まえつつ、中央の内陣から外陣にかけて一体

として作っている点には、多少乱暴な言い方になるが、尾道市の西郷寺のように、時宗の踊躍念仏の場を生み出そうとしたと想像できる。

さて謎解きのあとは、昭和八

（一九三三）年彩色のすばらしい内陣の莊嚴（写真④⑤）もご覧あれ。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】



写真③ 入側縁の欄間の松竹梅



写真④ 内陣境



写真⑤ 内陣



写真② 本堂正面の墓股。中央に梅鉢紋

「町家ギャラリー立山」のおはなし ①

山口啓二

ここに一枚の写真が残っている。創業四十五年の昭和九年四月に撮られた『永年勤続表彰記念』で、勤続三十年を祝つての撮影。永年勤続者は七十名余りだったので二班に分かれての撮影となった。

そして約七十名への記念品がなんと『黒柿の筆筒』。今では殆ど目にする事が無くなった貴重な日本家具の原材料である。この筆筒はいまでは三段ひと竿でも百万をゆうに超える



「永田村右衛門商店」の社屋（昭和9年）

代物。そんな貴重な材料がここ人吉球磨の山々に多数在り、それを活かせる『人吉家具』職人がここにはまだ充分居たのだ。これが記念品となった。

ちなみにその頃のこの会社の従業員数は約三百五十名、ここ人吉では大企業だ。中には親子兄弟で従事していたように、なんとも「居こちのいい」会社だったのだろう。

敷地には大きいプールらしきものが二つあり、そこでタービンを通して発電していたという。そこはのちにバッテリーグセンターに変わり、更に「寿屋人吉店」となった。

写真にある建て物が本社々屋。その二階は百畳の大広間で、階段が四か所あったとか。すぐ近所には既に百畳の広間を持った『芳野旅館』があつたのだが、一気に三百名以上の「山師」が山を下って集まり宴会をするとなれば自前の

『大宴会場』がどうしても必要だったのだろう。因みに出前は芳野旅館から。

記念撮影から三ヶ月たった七月、駅前的大火により無残にも建物は焼失してしまった。

人吉駅前には、以前から火事がよく発生した。今ではお社

が建てられ、鎮火祭もなお継続して行われている。

暫くして『旧八代郡泉村柿迫』の長老から杉の巨木の売買の話が出る。そこでこの巨木を買い受けて数年間乾燥させたのち、現地に製材所を建て材木に製品加工し、八代を経由してここ人吉まで運んだ。

それからしばらくたった終戦後、ほ

ぼ四年をかけて完成した家は、柱にも床にも天井板にも欄間にも、たった一つの『節』の無い素晴らしい柾目家屋に仕上がったのだ。熊本城・城彩苑の建築関係者もかなり驚きの様子で見学したそう。この庭園はいま『お庭くわん』の一角としても紹介されている。

さてこの杉の巨木の大きさと樹齢について考えると、関係者の話を考慮しても直径は三メートル以上はあったと推測される。樹齢は育った環境や特に日当たりとか水などに影響されるようなので結論は避けたいが、ざっと二千五百年程か。一



柾目の霧島赤松の廊下と庭



桑の古木を柱にした床の間

氣に弥生時代にさかのぼる事となった。

ここ人吉球磨には縄文・弥生遺跡や各地の古墳群、さらに須恵氏や相良家にゆかりのある建造物や文化財なども数多いが、この古民家も人吉観光の隠れた存在であることに間違いはない。若いお嬢さんにもアラサーアラフォーにも、高齢者世代にも十分受け入れられそう。間違い

さずがお茶屋さん、抹茶のかき氷や番茶プリンなどなど、ひと廻りしたあとに頂く本格的なお茶やデザートがとても美味しいので更にうれしい。

この貴重な建物を壊さず後世にまで残したいと言いう立山さんのおかげである。

来年は西南戦役からちようど百四十年。各所で弔いの催しが行われるのであろうか。

【やまぐち・けいじ／人吉市】

くまがわ英語塾

外来語から学ぶ英単語 (9) …… 藤原 宏

カー ・ チャリオット ・ カート
car chariot cart

Julius Caesar (ジュリアス シーザー) がケルトの二輪の戦車をラテン語で **carrus** (カッルス) と呼んだのが、フランス語 **char** (シャル) を経て英語に借用されました。

car は初め馬車や荷車、二輪戦車など一般的に乗り物を意味しましたが、19世紀初めに鉄道が開設されると、鉄道の車両の意で用いられるようになりました。米国では現在も鉄道の客車、貨物車、路面電車などを **car** と呼んでいます。しかし、1886年にドイツのダイムラーとベンツが相次いでガソリン自動車を発明してからは、**car** は自動車の意で使われ始め、現在は特に乗用車の意味が一般化しています。英語では **bus** (バス) や **truck** (トラック) は **car** に含まれません。

chariot (チャリオット) は、フランス語「**char** (シャル)、古代の戦闘・祭典・競技用の二輪馬車」の指小語ですが、現在のフランスでは、「荷車・手押し車・カート」の意で使われています。

cart (カート) も初めは二輪馬車のことで戦車にもなりましたが、現在は「**a shopping cart**」(買物用手押し車)、「**a golf cart**」(ゴルフクラブ用荷車)のように使います。

(375)

くまがわの神さん仏さん ⑦

球磨村神瀬の神さん仏さん

— 神さんが輝く40年前に —

宮原信晃

人吉から国道219号線を八代方面へ車で30分走り、球泉洞を過ぎて直線道路が右の急カーブへさしかかる、その道の左下に、大瀬阿蘇神社がある。これが二つ目。

そこから、車を10分走らせると右手に神瀬熊野座(岩戸)神社の入り口の前に。ここが二つ目の神社。ここから約5分で、三つめの神社、元神瀬小学校のグラウンドの奥に神瀬住吉神社が待ち受ける。

その神社から見えるのが、神照寺

(曹洞宗) でその前の道を大岩方面へ登れば乗光寺(浄土真宗西本願寺派)、球磨川の道沿いに信証寺(浄土真宗仏光寺派)と、まさに、神さんと仏さんが、仲良く三つずつ並んでいるのだ。

この歴史は「神照らす」が語源なのか。万治三年(1660)、大洪水で神社のご神体が川に流れ、毎夜川の瀬の中から光が輝いた。これをお寺のお坊様が助け上げ、今の住吉神社の場所へ神社を建てた。



神照住吉神社を守る方々。石鳥居はお殿様のお抱え石工・松尾傳六の1744年の作。その2年後、青井阿蘇神社の石灯籠も造っている

それが住吉神社であり、お寺の寺号を「神照寺」とした、とある。ここは、神さん、仏さんが仲良く暮らし、それを守る住民はそれぞれ

の神社やお寺を、今も守り続けているのである。「神瀬」^{こうのせ}、「神照寺」^{しんしょうじ}とは、まさに、場所の名称なのだ。

もう一つ、大きな歴史が残る場所でもある。ここから、「一向宗（今の浄土真宗）」の信者（隠れ念仏者）が、人吉藩の禁制を破り、球磨川を対岸へ渡ったという事実。

さて、これからです。もう少しお付き合い下さいね。

一向宗禁止をしたのは、薩摩藩（鹿児島）と人吉藩（人吉球磨）のみ。

秀吉の朝鮮征伐の頃に、薩摩の伊集院一族は、薩摩藩に抹殺された。

その難を察知した家臣は、伊集院家の家宝である石山本願寺から譲り受けた親鸞聖人の木像を抱えて薩摩を抜け出た。薩摩は一向宗

移動もなく押込んだ場所に今はお寺が存在する。

浄土真宗仏光寺派の寺がずらりと、大畑（大歓寺）、田町（洪願寺）、林（樂行寺）、神瀬（信証寺）と近くに並んで存在する場所は日本中になんという。

今でも、その親鸞聖人の木像は八代の正教寺に残っている。

神照らす川の瀬が光る万治三年（1660）からさらに四十年前のことであった。

ここは神も仏も輝く場所である。

【みやはら・のぶあき／人吉おおくま座の会事務局長】

とキリシタンの取り締まりが厳しい土地柄。そんな苦境の中で家臣は、家宝をからい薩摩の北、大口へ向かい、同じく一向宗禁止令の出ている人吉藩へ向かったのだ。

山越えをして矢岳、大畑へ。大畑では南無阿弥陀仏を信心する者たちが話を聞きつけて深夜に集まる。そこから漆田、田町へ。田町でも噂

が噂をよび、仲間たちが夜には集まり拝むのだった。ここで二年、次が三年と、親鸞聖人像は一度に移動できずに少しずつ、監視や取り締まりの目を盗んで場所を移動した。

その頃は国の宝、青井阿蘇神社の楼門や本殿を造っている時期である。

青井神社の前を親鸞聖人の像を

背負って林へ向かった。林では八坂神社（祇園さん）の屋根裏へ隠した。ここでも何年も移動できずに、隠し続けたのだ。夜になると信者が拝むという年月が流れた。

もう薩摩を脱藩してから二十五年が経とうとしていた。

最後の最後、ここは神瀬である。

いよいよ対岸の簸瀬へ渡るとき、八代の正教寺の信者の手をかりて対岸へ渡ることができた。親鸞像を抱き、家臣は八代の正教寺の山門をくぐった。

それから数年は家臣がその像を守って寺に住んでいたという。

いかに身を伏せ、深夜に動き、次の場所へと移動させた隠れ念仏の者たちの組織の存在。その念仏者たちが拝んだ場所、その数年間ずつ

くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

五〇年重ねる鑑賞わきくるはきらめく音と劇のかずかず
農夫たち土からつくる食べ物におのれいとわず人のためにも

三原 竹二

オバマ氏の鶴の折り紙映されて「平和」の二文字重ねて祈る
散歩道あおぎあおぎて夫と行く古城にかかる十五夜の月

坂本 ケイ

招かれて孫の日舞を観に行けりその指先のなんとしなやか
うたせ船の漁師ばつりとつばやけり「私ら夫婦でしまいですたい」

上田 迪子

風吹けばどんぐりの雨降りしきる王宮大祭子ども相撲に
初めての路線バスでの遠足はバス待つ時間も賑やかなりき

宮川しのぶ

蟋蟀や鈴虫の音を聴きながら日照りつづきの夏の日想う
台風に振り回されてこの秋は青物高く萌やしばかりを

吉岡 弘晴

偏見と差別と憎悪に塗れたるランプの性ヒトラーに似て
大うそを重ね重ねてアベなるは強行採決未だなしとは

上田 精一



徳田あけみさん（右）と順一さん（一番左）とご近所さん

平成23年の10月17日からだ。それまでは、ご主人の順一さんと二人でノリ養殖やアサリ漁、定置網漁など漁で生計をたてていた。しかし、そ

干潮の2時間ぐらい前に、定置網に入った魚が傍の船着き場に水揚げされ、店内の水槽に入れられる。ヒラメ、ハクダ、セゴ、チヌ、ハモ、コノシロ、スズキ、トラフグなどが泳いでいた。2kmはゆうに超えるカレイ

鏡川地先の漁業の現在

あけみさんは、球磨郡あさぎり町から鏡町に嫁いできたが、元々は鏡町芝口が郷里で、お父さんが開拓団として昭和33年あさぎり町に移住され、そこで育った。ご主人は3代目漁師である。

の数年前からアサリの漁獲量は減り、ノリは色落ちがひどくなり、漁だけでは生活できないと、このお店を始めた。

も入っていた。毎日、水揚げされるので、徳永さんご夫婦に休みはない。この店で扱うのは、ご主人と他3名の仲間の漁師さんが水揚げしたものである。昔だったら、一人の漁師が捕っていた量だという。つまり、漁獲量は4分の1に減少した。当然漁業者の数も減少している。

それでも、鏡漁協と文政漁協が平成6年に合併し、今の鏡漁協ができた時には、正組合員数は300人を超えていた。しかし、1昨年から正組合員と準組合員を厳しく線引きされたこともあって、鏡漁協で漁だけが生計を立てている正組合員は60人弱しかないという。私が八代海の問題に関わりだした時は、八代海の中でも鏡漁協は数百名の大所帯であり、ノリ養殖がとても盛んだった記憶が

不知火海の自然・生活

(4)

美海ダコちゃん

自然観察指導員熊本県連絡会会長 つる詳子



「美海ダコちゃん」のお店

八代市の鏡川河口近くに、八代海のとれたての魚を売っている「美海ダコちゃん」という小さなお店がある。ご主人と一緒にこのお店を切り盛りする徳田あけみさんを通じて、不知火海の昔と今の現状、そして徳田あけみさんの海やお店に対する思いを尋ねてみた。

「ミミダ」と「美海ダコちゃん」

お店の名前は、ミミダコという小さなイカの名前から来ている。5cm程にしかみえないこのミミダコは、ぱつと見た時もタコかと思うが、タコではなくイカである。長い2本の腕（触腕）を入れても10〜15cm程の大きさしかない。写真のお店の看板に見えるように、大きな耳がついているタコのように見えるため、この名前がついたようだ。正しくはボウズイカであるが、ノリの種付けをする晩秋によく捕れるこの可愛らしいミミダコをお店の名前にした。煮つけにしたり、天ぷらにして頂くと美味しい。

このお店を始めたのは、5年前の



店内には大きな水槽が二つある



魚の搬入

話題が魚から逸れるが、「美海ダコちゃん」の前を流れる鏡川には、クロツラヘラサギの休憩所がある。クロツラヘラサギは東アジアにのみ生息する世界的な絶滅危惧種であり、八代は越冬地の一つで、現在100羽程が冬季に観察されており、この鏡川河口はよく観察できる場所である。対岸であるために、鳥にストレスを与えることなく観察することができる。

殖、それにお店の経営で生計を立てているが、アサリの行使用料は今でも払っている。アサリに回復の兆しは見えないが、1年に4〜5回は皆でガンズメを使い手作業で干潟を耕して

いる。対象魚介類の多くが減少しているが、何よりお店のシンボルであるミミダコが今年はまだ入ってこないのが気がかりである。今年は雨が多かつ

たため淡水の流入も多い。また、地震で海底の地形もかなり変化している。今後、海の環境は改善していくのか、心配はつきない。

クロツラヘラサギ



お店の横の船着き場とクロツラヘラサギの休憩場所になっている波よけ堤防

昔はいて、近年見なくなつた魚はと聞いてみた。コチは今でも揚がるが、コチよりずっと小さいヨドコチというコチを全く見なくなつたそう。聞いたことがないコチの名前なので、地方名かもしれないと、大きさ(10〜15cm)やニトロ(ぬるぬるした粘液)で覆われ、背側に棘があるという特徴だけを頼りに調べてみたが、コチ(カサゴ目コチ科)にそれらしい魚はいない。コチという名前を持つが、コチ科ではない魚がネズツボ科(スズキ目)に

いると分かり、調べていくと、このヨドコチの正式名はネズミコチだと分かった。ヨドコチというのはやはり熊本の地方名で、ヨドというのはヨダレのことである。内湾の浅い砂底にすむとあるので、いなくなつたのは砂地の干潟が少なくなつたためであると想像できる。ウナギやカニやエビ等含むすべての魚介類だけでなく、アマモ、ナゴヤ(オゴノリ)等の海藻もすべて少なくなつた。ここ数年は、ノリの種付け時期に捕れていたオダエビ(シラサエビ)もいなくなつたという。また、ジガキと呼ばれるコロビガキ、タイラギ、シオフキなどの貝類も見なくなつた。漁法も昔はみんな投げ網だったが、今は定置網に変わってしまった。ご夫婦は現在、定置網漁とカキ養

ある。それが、ノリ養殖を営んでいる人は、去年で3名までに減少、今年にはいるものがないのか、あけみ

さんは心配する。

漁業の変化と課題

休憩所といっても、波除けのために造られた構造物であるが、クロツラヘラサギの良い休憩所になっている。

鏡川上流や八代の干潟で給餌するクロツラヘラサギも、ここに休みに戻ってくるものが多い。そのために、県内外のバードウォッチャーが多い。特に、春になると韓国の繁殖地に戻るものが多いため、クロツラヘラサギは、韓国と日本の架け橋的な存在にもなっており、韓国の自然保護活動家や研究者だけでなく子供たちの訪問もよく見られる。ここを訪れるバードウォッチャーにも、八代海の魚の美味しさを味わってもらえれば、干潟の重要性も一層実感してもらえそうである。

将来に夢を託して

「美海ダコちゃん」は、目立たない場所にあるが、いつも漁師仲間や近所の人たちが集まり、地区の集会所みたいだ。自分たちで勝手にお茶を入れ、会話を楽しみ、お客さんがくれば相手もし、魚が水揚げされれば手伝いもする。徳田さんご夫婦の人のなせる技だ。

「美海ダコちゃん」では活魚の販売の他に、惣菜の販売やお弁当の注文販売も行っている。あけみさんは、平成13年から始まった県の認定制度「くまもとふるさと食の名人」の第1期生である。そのために、料理教室の依頼も多い。男性の料理教室や高校からの依頼などがあれば、出かけていて、魚のさばき方から料理法まで

を指導する。そんなあけみさんに将来の夢を聞いた。「隣で、新鮮な魚を使った料理を出すお店を開きたい。市場に回らない雑魚なども美味しく食べてもらえるような店を」という答えが返ってきた。

正組合員が少なくなりつつある鏡漁協であるが、最近はカキ養殖も軌道に乗りはじめ、若者世代が始めた「鏡オイスターハウス」も盛況であるなど、明るい話題もある。

漁師が漁師として生活できること。それが徳田さんご夫婦の願いである。

※「美海ダコちゃん」所在地…八代市北新地字七番割1373 (☎/Fax 0965・53・8755)

【つる・しょうこ／八代市】

一度は行ってみよう

今泉地区（八代市坂本町）

（編集部）

今泉地区は、旧八代市から人吉にむかうとき最初にある坂本町内の集落（球磨川左岸）である。

第13代相良長毎の 供養塔がある。

写真①が供養塔である。それにしては相良家の殿様の供養塔がなぜ同地区（坂本町今泉）にあるのだろうか。相良家は人吉球磨地方の殿様じゃないのか。そうした疑問を持つ人もいるかもしれない。そういう人たちが勉強不足だというわけ

ではない。だれでも知らないことはあるし、知らなくても恥ずかしくはない。

相良家は、一時期（といっても、かなり長い期間）八代地方を支配していた。第13代長毎（1469年～1518年）はそのときの殿様のひとりで、八代・古麓城を本拠地にしたのち今泉地区に隠居所をかまえ同地で亡くなった。それで同地に長毎の供養塔がある。

供養塔は、長毎を「第14代」と書いている（相良氏第一四世加清

公）とある。加清公は長毎のこと。溝下昌美「第十三代相良長毎の供養塔」週刊ひとよし827号8頁参照。家老をつとめた田代政嗣がこのように書いたのだが、長毎は「第13代」とするのが通例である。田代は誤解・誤記したのだろうか。

素人には、そのあたりの事情は難しく、いつたい、どうなっているのだろうか。と不安になる。益田啓三さん（人吉市）にうかがったところ、それは相良家の初代を誰とするのかという問題に関係しているようだ。多良木の地頭に任命された頼景公



① 相良長毎の供養塔

に、400年前の殿様の供養塔をなぜ造ったのか。特に・慶応元年は相良家の兵制（山鹿流を主軸にするのかオランダ式を主軸にするのか）をめぐる藩内が極度に対立していた時期である（「丑寅騒動」発生の前最）。「寅助火事」などの相次ぐ大火で財政的に疲弊していた時代でもあった。

製鉄所の跡地がある。

幕末の動乱は全国各地に鉄の生産を促した。相良家は鉄を製造するのではなく輸入する途を選択した。これに対して松井家（細川藩筆頭

家老で八代城の城主）は今泉地区に製鉄所を造る方向を選択した。一種の公的製鉄所で、「御用製鉄所」といい、嘉永2年（1849年）に操業を開始し、その鉄を利用して鉄砲・刀剣を造った。松井家でそれらを利用しただけでなく、八代の商人たちを通じて、長崎方面にそれらを売ったという。

溶鉱炉に砂鉄と木炭を交互に入れて鉄をつくった。砂鉄は薩摩の長島から「輸入」し、球磨川河口から今泉まで舟で運んだ。木炭は地元のものを利用した。今泉は山中にあつて木炭の供給元として最適であった。鉄を生産するためには高度の技術を有する職人が必要にするけれども、松井家内にはそうした熟練の職人は十分にはいなかった。



② 製鉄工場跡の石碑

そこで石見国（島根県西部）の職人を呼び。彼らが鉄を造った。石見国から今泉に移住して作業したのか、石見国を本拠地としつつ今泉で作業したのかは不明だが、職人の移動は比較的に自由であつたことは確認できる。

製鉄所は明治10年（1877年）まで鉄を造った。明治10年は西南戦争勃発時である。西南戦争で日本は「近代化」の方向に一挙にむかう。この製鉄所の歴史は時代の転換点と重なっている。田代政嗣たちが長毎公の供養塔を建立しているとき、製

鉄所は稼働していた。製鉄所跡は地中に埋もれているけれども、保存状態は良好で熊本県指定の遺跡である。（写真②）

天文台への登り口

今泉から山を登っていけば八竜山天文台にたどり着く。天文台は魅



③ 今泉八竜山への登り口



④ 今泉天文台

力的だ。一度行っても損はない。大型の望遠鏡で宇宙をみれる。小型の望遠鏡もあつて八代市内はもちろんのこと天候がいい日には熊本城もみえる。「小型」といっても本物の望遠鏡は流石にちがう。ちかくにはバングローもある。（写真③、④）

展望台の登り口は二見地区、瀬戸石地区からつづく「山の道」の下り口でもある。二見地区は不知火海、瀬戸石地区は球磨川沿いにある。二見地区は坂本内の百済来、

鶴喰、渋利、瀬高、今泉に道がつながっている。瀬戸石地区も同じだ。今泉地区は、海や川の道だけでなく「山の道」の結節点だ。いまでも、マラソン・駅伝の選手たちはこの登り口を利用して鶴喰地区まで走っている。その鶴喰地区は日奈久につながっている。天文台も魅力的だけでも「山の道」を歩くのも悪くない。

「山の道」は偶然にできたのではない。戦国時代の軍事路線として意識的に作られた。これについては別の機会に説明したい。

球磨川向きに門をかまえる

お寺がある。

法讃寺（浄土真宗大谷派）は球磨川を意識している。川舟を利用し

て信者が参拝することを予定しているのだ（写真⑤、写真⑥）。

しかし、舟を操る者たちだけが法讃寺の信者ではない。山中の渋利

地区の住民の多くも同寺の門徒である。それは前記の「山の道」に関係している。



⑤ 球磨川対岸から見た法讃寺



⑥ 球磨川の方角にある法讃寺の正門

今泉薪窃盗事件

上村雄一

「二度は行ってみよう。今泉地区」の今泉地区には次の伝承がある。

「むかし、源さんがいた。他人の山を荒らしていた。夜中に渋利部落の薪を勝手にとり自分のものにした。昼間は寝ているのに、薪は増えていくので、今泉地区の人たちは源さんが犯人だと疑ったけれども、源さんが知らんふりをつづけるのでどうしようもなかった。しかし、源さんは山を本当に荒らしていた。山童（ヤマワロ）はそれを知っていた。山童は、昼間に人間がすることについて口をださないが夜はちがう。夜は彼らの世界で、源さんを許したい悪人だと考えた。山童は、最初は大木を倒す音や岩石が落ちる音をたて源さんに悪さをする

など警告した。源さんはそれを無視して薪を盗みつづけた。山童はどうとう我慢をできなくなつて源さんを踏み殺した。

民俗学や歴史学を専門にしないこともあつて、この伝承を深く考えなかった。昼間に寝ているところは「三年寝太郎」に似ているとか。怠惰な者は財産を失うといった一種の教訓話に近いとか、夜は神秘の世界だから外出してはいけないといった昔の人たちの精神生活を反映した逸話であるとか、「昼間は仕事して、夜は家にいなければならぬ」を基本メッセージとする物語であるとか、その程度に理解していた。

その後、いくつかの資料に接して、この伝承に注目するようになった。たとえば松井家の文章に次の記録がある。

寛政二年（二七九九年）二月、今泉部落の百姓十七名は、連名で庄屋佐々木次兵衛に申し立てをした。これまで今泉部落は、四千束の薪を年貢（薪運上）として

上納してきた。しかし最近、薪を盗まれることが多く困っている。特に、今回は鶴喰の山境に積んでいた薪のほとんどを盗まれてしまった。翌日、別の場所を見張っていたら、五〇人から六〇人の者が薪を盗もうとしていた。そのうち植柳の者四人を捕まえたが、他は逃げた。捕まえた四人のうち、植柳村三郎衛門の伴・惣助を人質



今泉 鶴喰地区



今泉 渋利地区

にして弁償交渉してきたが埒があかない。それで訴えることにした。

この申し立てが、最終的に、どのように処理されたかは分からない。ただ今泉地区の伝承とこの事件が酷似していること、おそらくは、この事件を基礎にして源さんの伝承が発生したことは確実である。伝承と資料を重ねると、窃盗事件には今泉地区の者がかわつていて薪の隠し場所を窃盗集団に教えていたこと、内通者は「源さん」であること、「源さん」は誰かによって殺害されたか、不慮の事故で死亡したであろうことなど推測できる。

松井家文書は、窃盗団の規模、出身地、窃盗地を具体的に書いている。一見すると、今泉地区は鶴喰・渋利地区からずいぶん離れていて、そこが窃盗地であったことに驚く。しかし、これらの地域は「山の道」でつながっていて、容易に薪を搬出できた。相当規模の者が窃盗に関与した事件だが、それは「山の道」を利用できたからである。

それにしても窃盗団の規模は大きい。それだけ薪に価値があったのだろう。植柳の者が窃盗にかかわっている点もみすごせない。植柳は八代飯屋（球磨飯屋）のあった場所で、相良の者がこの事件に関係していた可能性を否定できない。今泉は相良家と縁が深い地だ。これにか

かわつて今泉の者が窃盗団と「弁償交渉」をしていること、つまり事件を公にすることを避けていることが注目される。「窃盗」事件として訴える前に弁償交渉をしているのであって、交渉が成立すれば事件は公にならなかった。人質をとられているにもかかわらず、窃盗団が「交渉」にに応じていない点にも意味がありそうだ。人質を通じて窃盗団のメンバーは容易に特定されるにもかかわらず交渉を拒否している。窃盗団は、ある意味で、強気である。なぜ、強気だったのだろうか。八代飯屋と事件は関係しているのではないかと推測する理由はそこにかかわっている。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】

くまがわ狂句

村上鬼拳

ひつ縮み 「家庭の医学」 読み漁り
三枚目 なかなか移動せん朶
幼なじみ 手錠に上着掛けてやり
深呼吸 拳に思い止まらせ
飯が美味い 山野が僕の主治医です
早朝から 近所も知らん逮捕劇
乗り換えて お国訛りにホツとする
あの日から 僕だけ花のあるデスク



【むらかみ・きけん／人吉市】

「君の名は。」を観ましたか

平岡優平

文化に優劣はない。江戸文化がすぐれていて相良文化・松井文化が劣後していたわけではない。同じく、都市文化が進歩的で地方の文化が退歩的でもない。「標準語」が立派で「方言」が見苦しくないのと、そ



菊陽町光の森の映画館

れは同じである。人は、それぞれの時代に、それぞれの地域でそれぞれのやり方で生きてきたし、いまも、

生きている。そうした生きる営みの総体が文化である。

それでも、ときどき思うときがある。たとえば図書館・映画館にいったときである。地域の財政力に關係し仕方ない面もあるけれども、資料を調べるとき地方の図書館では限界がある。そういうときには都市部の図書館が羨ましい。地域によっては、図書館が書籍の新規購入を一切していない例もある。そのときには新刊本は自力で購入するか、知人・友人から借りなければならぬ。書店がなく新刊本を購入するために遠方

まで出かけるなければならない。インターネットを利用して購入することは可能だけど地元の本屋を利用したい。映画になると宇城まで出向くしかない。

本なしの生活、映画なしの生活もいいではないかとの意見もある。そうかもしれないし、流行している新刊本・映画を読まなければならぬ、観なければという脅迫観念があるとするれば、そのほうが、かえって問題だ。又吉直樹『君の名は。』を読まなくても深海誠『君の名は。』を観なくても、知的刺激を受けるもの、つかれを癒してくれるものは身近に転がっている。けれども、よくよく考えてみると、これは初老の発想だ。若い人には流行が必要だ。それどころか、流行を追い求めるところに若

者の心性がある。彼らには『火花』や『君の名は。』が必要だ。若者にそれらを提供できるようにするのは個々の家庭の課題ではなく地域共同体の役割である。その役割を果たせないでいるとき若者は都市部に向かう。都市部は多様な情報の集積地である。雇用の場がないという理由だけで若者は都市部に向かうのではない。流行の最先端に接したいという欲求も彼らを都市部に向かわせる。



人吉映画劇場（昭和33年頃）

にせよ、観客数がちがう。

県北は豊かになっているけれど、県南は落ち込んでいくとの風評に接するときがある。そうした風評はこういう事情にも関係しているようにもある。地方再生を考えるとき映画館の利用頻度につい

ても目を向ける必要がある。それは県南の若者がどのような文化状況に置かれているのかという問題に直結する。図書館、博物館、映画館があつても、それに若者だけでなく年配者も向かわせない文化状況が形成されているとすれば問題だ。映画は斜陽産業で観客数の減少は歴史の流れであるとか、図書館や博物館は利用者数が少ない運命にあるといった俗論でそれらの状況を説明すべきでない。くりかえし云う。文化に優劣はない。けれども文化状況を確認しておくことは無意味ではない。若者がどのような文化状況のもとにいるのか、彼らに展望性を与える環境になっているのか。私たちは知るべきだ。

【ひらおか・ゆうへい／八代市】

せきれい 鶴鴿短歌会

十二月詠草

木犀の香漂ふ早秋の日溜に立ち花を確かむ

チャップンと池に跳びこむ青ガエル睡蓮の葉に身を寄せ隠る

守永 和久

日向路の西都の原は天高し古墳群の草青々として

日向灘しづきを上げる波浦に若きサーファー身を屈め舞ふ

河内 徹夫

肩痛の右手使へぬ吾を見て嫁はやさしく風呂や食事を

久々に空に広がるいわし雲共に生きると決めた日の雲

中村美喜子

庭隅の茗荷に堆肥施しぬ黄色に芽吹けば収穫楽し

妻の手で食卓潤う碗の鯛秋の茗荷に至福のかほり

西 武喜

神輿の行列見たがる夫と行く「お元気ですね」と声掛けられて

傘寿祝ひ準備済ませて酒を飲む校歌唄へば十八歳に

釜田 操

同窓会久しぶりに友に逢ふ懐古の話尽きることなく

故郷に集ひし我等クラス会紅顔のイメージ今も残りて

緒方 保正

冬支度済ませて待てど寒々来ず扇風機未だ同居のままに

認定に來られた時に吾が夫はまともな話で返事してをり

中原 康子

ざわざわの街中抜けて散歩路空見上ぐれば澄んだ星見ゆ

早咲きの椿一輪手折り来て床にかざりて一人楽しむ

三原 光代

火の山に耐えて咲いてるノカイドウ新燃岳の降灰後に

えびの路はススキの原にトンビ舞ふ轟くマグマ今は静かに

橋詰 了一

現世はN次元の折れ線グラフ我導きし出逢いのありき

木犀の花絨毯に飯事の児のジャージの白きが映えて

堀田 英雄

私と犬童球溪記念館

犬童球溪記念館館長 鶴上寛治

忘れ去られるかも知れなかった明

治生まれの一田舎教師の犬童球溪の

名が今も人々の心に残るのは、ひと

えにこれまでの、そして現在の、郡市

民皆様のおかげだと感謝しております

す。昭和23（1948）年以来、大

水害の年も、歌舞音曲の自粛が叫ば

れた昭和天皇崩御の年も、熊本大震

災の今年も、一回も欠かさず開催され

ている犬童球溪顕彰音楽祭。運営に

携わられる方、それに参加される方々

にただただ感謝するばかり。「インド

ウキウケイってダレ？」と訊く子ど

もに「こんな人よ」と次の世代に伝え

てくださる大人たちにも感謝。

遺族として、それに応えるため何

をすべきか。今年3月に他界した球

溪次女の犬童トシも自分が住んでい

た西間下町252番地の球溪旧居の

ことが気がかりで、いつでもどなたで

も球溪に関する資料が見られるよう

にちよつとりフォームしたら、という

私たちの意向に賛同していただきましたので、改装費用のほとんどはトシの資産に頼りました。

記念館の中味としては、少年時代のノート（毛筆書き）や卒業証書類、青年時代の手紙類、晩年の遺品、などなどを並べています。古いアップライトのピアノも健在です。弾いてくだ



10月1日に正式オープンした犬童球溪記念館
(人吉市西間下町)

さつて結構です。(展示コーナーは入館無料)

元の建物は、大正12年建築ですが、柱・梁(天井裏のこの見事な梁が来館者に見えるように、との棟梁の意見を入れた)・昭和初年増築の洋館など、建築関係の方々の参考になりそうな部分もあります。和室4室をつないだフロアーもあり、ミニコンサート・小演芸・諸会議・研修などにも



球溪が愛用していたピアノ



球溪直筆の資料などの展示スペース

活用いただけます。(こちらは有料)

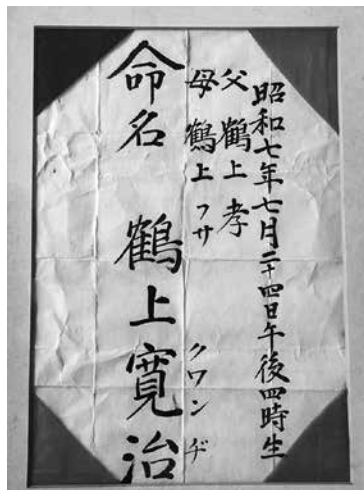
館長がお相手できる時でしたら、『球溪こぼれ話』を混じえての解説もさせていただきますし、昭和12年録音の球溪の声(生涯に一度だけ出会った滝廉太郎との対面の場面もはつきり聞き取れる)をお聞きいただけます。何はともあれ、一度御覧あれ。

正式オープン前に「道徳の教材に球溪が載っていたので」と勉強に來られた先生があり、その教材を手にし

てみると——学校の音楽室にしかなかったピアノの練習に早朝からやってくる生徒のために、宿直していた球溪がわざわざ湯を沸かして洗面器に入れて運び、手を温めさせてやった——という話が載っていました。今の子どもたちは「部屋全体を温めりゃいいのに」とか「我が家にピアノがないなんて」と思いうかも知れませんが、この記念館に來ればその答えが見つかるかどうか? 見える人には見えるでしょう。今は見えなくてもいつか見える日が来るでしょう。

「柴刈り縄ない草鞋を作る」ことのない現代、その教材をどう扱うのか?——相對する人に対しては、常に相手の身になって自分のベストで接することが大切だ、ということでしょう。

うか。球溪が県の近代文化功労者に、また人吉市名誉市民に推されたのも、その業績もさることながら、その人柄にもよると思われまします。志を立てて苦学力行、遂にそれを果たし、中央で華々しく活躍、ではなく周りから勧められ、図らずも歩まれた道をこつこつと真面目に果たし、常に「故郷への恩返し」に徹しながら故郷への恩返しを果たした「偉大な凡人」であることが評価されたのでしょうか。



球溪が出征前に書いた鶴上家への命名書。男の子だったら「寛治」にしないと書かれてあった

婆が這うように出てきてやつと鍵を開けてくださる、なんて所もあって——どうこの記念館運営を続けて行くかはこれからの課題です。容れ物と中味は充実しましたが、運営費はアツ

プアアップ。日曜日の記念館当番も無給のボランティアです。さつき有志の方々が「犬童球溪記念館を支える会」(会長前田一洋氏)を作ってください、物心両面でのバックアップをしていただいております。ただいまこちらにも広く会員募集中です。

【つるかみ・かんじ/球溪の孫】

犬童球溪記念館

熊本県人吉市西間下町 252 番地

TEL /FAX 0966-22-3568

(開館日以外は留守番電話)

開館時間:10 ~ 16 時半「日曜のみ開館」

※開館日以外の見学をご希望の方は事前に電話、メールなどでご相談ください。

レンタルスペース:(50 人位まで) 有料

駐車場:8台程度

ホームページ: <http://kyukei.jp/wordpress/>

山神祭

やまのかんまつり

上村雄一

12月は、多くの地域で、山の神様を祀る。祀りの日は地域によって異なる。荒瀬地区（八代市坂本町荒瀬）は12月15日に、おこなう。山の神様は川神様とは夏と冬に入れ代わるとする地域もあるが、荒瀬地域にはそのような伝承は残っていない。

山の神様は、醜女で嫉妬深いため、女性には祀りに参加できないとする地域がある。荒瀬地域も女性には山の神様の御座所に入れないが、その理由は伝わっていない。御座所は5箇所ある。なぜ5箇所もあるのか。その理由も分からない。おそらくは、5つの集団が

荒瀬地域の開墾にたずさわったことに起因するのであろう。

お神酒、ご飯、桑を山の神様に捧げて、祀りは終わる。

そのあと地域世帯が集会場に集まり飲食をともにする。地域を三つに分けて、隔年ごとに、飲食の準備を担当する。担当になった世帯は、大根1本と里芋10個を持ち寄る習わしであったが、高齢者世帯の負担を軽減するため、先年、それは中止になった。現在は、地区全体で、飲食用材料を購入入している。



白菜の煮染め、大根のスワエ、イワシの煮付け、ゼンザイなどをいただく。ビールや焼酎もだされるけれど

も酔うほどに呑む者はいない。山中の地域にもかかわず、イワシは必ず用意される。その理由を古老にたずねたけれども、「昔から、そうだった」とのことであつた。山の神様が醜女だから、オコゼを食するという地域もあるけれども、荒瀬地区には、そういう伝承はない、川魚でなく海魚（イワシ）を食する例は全国に相当に存在する。しかし先のとおり、その理由を知っている者は荒瀬地区にはいない。

荒瀬地区の人たちはゼンザイを好む。以前には23杯ものゼンザイを食べた強者もいた。甘味のある食べ物が少ないため、だれでもゼンザイを好んだという。この嗜好はいまもつづいていて、90歳近い人でも3杯は食べている。

【うえむら・ゆういち／八代市坂本町】

石橋を訪ねる

橋詰橋

昭和29年（1954年）4月1日、神瀬村、一勝地村、渡村の三村が合併して球磨村が誕生した。橋詰橋は、

昭和28年に一勝地村が計画し、昭和30年に完成した。球磨川支流の芋川に架けられている。球磨村の少ない石橋である。以前は下流に石橋「一勝地橋」があったが、撤去され

球磨村一勝地字橋詰

て、いまはない。

芋川は、上流に鋳物工場があつたことに由来し、もとは「鋳物川」と呼んでいたが、それが訛つて

「いもがわ（芋川）」となったとの伝承がある。この伝承に根拠があるのか、いつ発生したのかは分からない。江戸時代の資料は「芋川」と書き、球磨村誌上巻329頁は「芋の多くとれる芋川」と説明している。

石工は下舞清（鹿児島県）。地元業者も建設に協



（編集部）

力した。橋長20・2メートル。橋幅4メートル。

同橋上流には「飛び石橋」がある。飛び石橋は、石を並べただけのもので、のちに板の橋、土の橋に取って代われる。古い文献でいう橋は「飛び石橋」のことである。

坂本の舟頭、都城へいく。

編集部

舟乗りの仕事

昔の仕事などいまの言葉で説明するのは難しい。舟頭もそうである。現在は、「竿で舟を上手くあやつる人」というイメージだろうか。球磨川は急流で瀬もきびしい。その球磨川を竿であやつる舟頭さんの技術力に接するとき、その上手さに驚く。職人業というほかない。

むかしの舟頭さんの竿さばきはどうかと考えたりもするけれども、イメージできない。舟の形もちがえば、瀬の様子もちがっている。いまと昔を比較することには、そもそも無理がありそうである。

それでも、江戸時代の舟頭とちがう点を指摘できないわけではない。社会的分業は現代ほど細分化していたわけではなく、舟頭は、人や物を運ぶだけでなく、運輸物を売買

する商人的側面も有していたし、舟の通航路を整備する土木作業員的な面ももっていた。「商人」であったのは理解しやすいかもしれないけれども、球磨川の石を取り除いたりする作業はむしろ彼らの重要な仕事であったともいえる。舟を使うためには、とにかくにも、舟を利用できるように川を「整備」しなければならないからである。運輸の難所を「悪瀬」といった。

松求麻舟乗り

球磨川の舟乗りのうち、八代市坂本町の舟乗りたちは「松求麻舟乗り」と呼ばれていた。「松求麻村」は坂本町の古い名前で、「松求麻舟乗り」はその地名に由来する。

寛政年間初頭、都城領主・嶋津久倫（都城嶋津家は薩

摩藩嶋津家の分家で、久倫は藩主の家臣になるけれども都城領について一定の支配を認められていた）は大淀川の舟運開発を計画し、藤崎五百治（都城の傾向場の校長であった）などの家臣に各地の舟運業を調査させた。藤崎は

すべき点が多々あるが、ここでは松求麻舟乗りの採用方法に注目したい。嶋津家から細川家への人員派遣の要請という形をとっていないのである。

他地域の領主による舟頭の採用方法

藤崎五百治らは、松求麻舟乗りを採用するとき、肥後藩（八代の松井家）に相談するのではなく、川舟頭・水主の居住地に赴き、その地域の庄屋に直接に協力を依頼している。庄屋は依頼を受け入れ、現地調査のため3名の「老人巧者」を都城に派遣することにし、藤崎の訪問を受けたこと、訪問内容（藤崎の要請）に協力したこと、協力することで肥後藩（松井家）に迷惑を掛けないことを申し立て、藩側（松井家側）がそれを承認するという形式をとっているのである。現代風にいえば、外国への渡航許可申請に近い手続である。年貢提出（舟乗りであるから銭納ということになる）や公役負担（道路の補修作業などの公役）など藩運営（行政運営）に支障を来さないのであれば他領（都城）に赴き作業してもよいとする（義務さえ負担すれば、それで十分であるとする）姿勢である。その場合の義務履行者は、



多くの船頭を送り出した坂本町藤本地区

最終的に球磨川に注目し「川筋第一上手」として「松求麻舟乗り」に助力を請うことにした。久倫の計画とおり、松求麻舟乗りたちは、寛政3年（1791年）から寛政9年（1797年）まで大淀川に赴き舟運開発にあたることになる。この事業については注目

派遣労働者個人でなく、派遣する地域（地域共同体）ということになる。地域共同体は義務（肥後藩に対して負っている）を履行するかぎり、労働のあり方（労働者派遣を含めて）については一定の「自由」を有していた。逆にいえば、肥後藩は技術の流出にさほどこだわっていない（表面的には、そうである）。

「老人巧者」による現地調査のあと、地域（舟頭・水主の共同体）は、開発事業の複数の適任者を選び出し、「老人巧者」の場合と同じ手続きを踏んで、その者たちを都城に派遣している。この者たちは、現代風にいえば舟乗りのエリートであるけれども、そのひとりの身分は、「無高百姓」であった。

脱走と刑事罰

開発作業は順調に進んだが、最終版になって重大問題が発生した。派遣者の一人（もともとも有力な者）が「欠落（逃亡）」したのである。派遣先の嶋津家が探索したほか、派遣元（松求麻舟乗り）たちも本人を探した。しかし、結局、見つめることができなかった。細川藩（松井家）は、派遣元集落

ではなく、本人が所属する五人組を罰した。実質的責任とは別に、可罰対象は五人組に限定するという觀念が成立していたのであろう。この「欠落」を機に、大淀川開発への舟頭・水主の派遣は中止になった。しかしながら、その後、緑川開発、筑後川（天領日田）に、同じ地域の者たちが開発指導者として出向いている。つまり都城の責任がその後の派遣事業に影響していない。刑事責任の範囲は想像以上に限定されていた。

他藩の藩士による球磨川の調査

藤崎五百治らは、松求麻舟乗りを採用しただけでなく、球磨川の舟運の状況を詳しく記録している。どこに瀬があるかなど詳しく記録し、都城嶋津家作成の「庄内地理志」に収められている。江戸幕府の勘定奉行、普請奉行も球磨川の状況を調べているけれども、他領の藩士による調査も相良家と松井家は認めていたのであった。

二宮金次郎

城木松男

金次郎は、農業に励み身を粉にして働き、深夜まで勉強する少年であった。祖父から「灯油の無駄遣い」と叱られるほどに勉強した。そういう彼を日本人は刻苦勉励の人として称賛し、柴を背に本を読む彼の姿は銅像になった。

じつさいの金次郎（二宮尊徳）がどのような人物であったかは知らない。しかし、彼の銅像は、長いあいだ、子どもだけでなく大人も目指すべき目標をシンボリックに示していた。批判される余地のない人物、それが金次郎であった。その金次郎（の銅像）の評判が、近ごろ、かんばしくない。それは思い

がけないところからあらわれた。「歩きスマホ」は危険であるとの批判から派生的に出てきた。

歩きながら（あるいは、自動車を運転中に）、携帯電話を操作することを「歩きスマホ」という。携帯電話に集中するあまり周囲がみえなくなり（視野狭窄になって）、他人に衝突して駅のホームに落下する事故が多発している。金次郎の姿は「歩きスマホ」を助長させるというのだ。刻苦勉励を否定しているようでこの意見に直ぐには同意しない人が多いけれども、落ち着いて考えれば、その指摘は誤っていない。どう考えても、ふたつのことを同時にすることは生産的ではない。本を読みながらでは歩く速度がおちるし、歩きながらであれば本の内容を正確に理解できない。二兎を追うものは一兎も得な

いは正論だ。

一般人と尊徳先生を同列におくべきではないとの反論は甘んじて受けよう。しかし天才的人物を目標に設定しても意味がない。金次郎にならないと立身出世できないとの批判はあるだろうし、金次郎にならないければ「普通の生活」を維持できないとの意見もあるだろう。けれども金次郎の時代はすでに終わった。「歩きスマホ」に金次郎は負けたのだ。「歩きスマホ」たちは金次郎を例に出せば反論できることをいまや知っている。

ティーチャー・ランニング（師走）はどうか。この言葉は生き残って欲しいと願う。先生、お坊さんが年中忙しい社会では教育・文化が衰退してしまう。

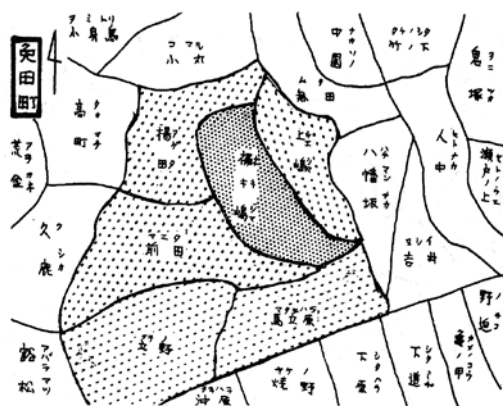
【しろぎ・まつお／八代市】

字図で見る球磨の地名 ⑧ 上村重次

櫛キ嶋（ネキシマ）

— 免田町 —

明治前期町村小字調査書によると、免田村（免田町）の字名は二三件あるが、『日本地名大辞典43熊本県』



（角川書店）の資料編・小字一覧には二三件しか出ていない。小字調査書には櫛キ嶋（ネキシマ）が出ているものの『日本地名大辞典』にはみえない。町の字図では「葱島」と記載されている。このシリーズでは明治前期の用字・訓に従って櫛キ嶋（ネキシマ）にした。

現行字図のように葱島と書けば野菜のネギ特産地のように思える。小字調査書に従って櫛キ嶋と表記すれば神官の櫛宜（ねぎ）が想定され、近くの字八幡坂（ハチマンサカ）と付会して「八幡宮神官の所有地にちなむ字名」という解釈も出て来よう。

神官の櫛宜は神への祈（ねぎ）に由

のであろう。

免田町の字櫛キ嶋を字図で見ると、字立野（タテノ）、字馬立原（マタテハラ）という境界特有の地名があつて、その北方は字前田（マエタ）、字揚田（アゲタ）、字上嶋（ウエシマ）、字櫛キ嶋の配置になっている。上・揚・前などは特定地（たとえば屋敷地、社寺、境界など）に対する方位を示す用語である点を注目すれば、櫛キ嶋は「境界のネギ」の表現と考えられる。ネキはニキともいうが、ニキ地名は次回に取り上げる。

荷伐（ニギリ）

— 球磨村神瀬 —

側（そば）、傍（かたわら）のことをネキと言うのは関西に多い方言であるが、熊本・宮崎・鹿児島県などで

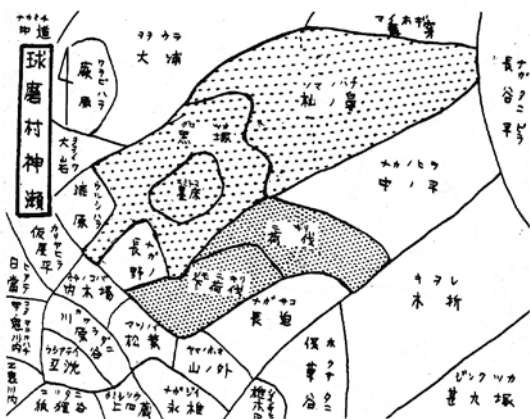
【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版です。市町村合併前の地名となつていますが、ご了承ください。

来する語で『続紀』十七、天平勝宝元年（749）十一月條に「八幡大神禰宜外従五位下大神社女、云々、賜大神朝臣之姓」と見えて古代からの用語である。後には宮司（かんぬし）— 櫛宜 — 祝部（はふり）— 巫覡（かんなぎ）というように職階級を表すようになった。一方、葱（ねぎ）の本名は葱（き）であつて二字一音であるところから、一文字（ひともし）と別称され、根を食するのになんで根葱（ねぎ）と呼ばれるようになった（『大言海』）

以上のような櫛宜や葱の経過をたどると、共に地名との関連はないよ

はニキとも発音する。（『日本方言大辞典』）。

球磨村神瀬の字荷伐、字下荷伐は明治前期町村小字調査書には出ていないが、球磨村の現行字図、字名台帳には「ニギリ」の訓を付して記載されている。この荷伐も蕎麦（ソバ）



うに思われる。熊本県内市町村字名四万三千余件の中で、ネキ地名は免田町の櫛キ嶋の他に阿蘇郡一の宮町三野字根木町（ネキマチ）が見えるだけである。ところが『大和地名大辞典』には奈良県の市町村小字のネキ地名が八〇件余り出ている。多くはカナ書きであるが、櫛宜田や櫛宜ノ谷、彌宜（櫛宜か）の用字も点在するものの、根木・根キの表記が目立つ。このことからネキ地名は傍や側の表現に因むものと推定される。

『大言海』は「ねぎ」を方言として「根際、キハ、ソバ、カタハラ（近畿）」としており、『日本方言大辞典』によると、傍・側の意をネキと言うのは全国的ではあるが関東は少なくて関西に多い。奈良県の小字にネキ地名が多いのは方言のネキとの関係が強い

や杣(ソマ)、欄キ(葱)と同じく境界近傍表現の地名と推定される。

『日本地名索引』によると、岩手県の遠野図幅に新切(ニギリ)があるものの地名由来はわからない。熊本県内町村小字では玉名郡天水町小天字二切(ニノキリ)があるが、これは干拓新田の区割名称で他の干拓地にみられる二番割と同意だから荷伐との共通性はない。菊池郡旭志村新明字賑ノ平(ニギノヒラ)は球磨村の荷伐と同系地名のように思える。江戸時代の資料には人吉市の鬼木を「大賑」と表記する例(聖泉院観音堂棟札)もあり、賑はニギの宛て字と判断するのである。

ただ、荷伐をネキ・ニキの変化形とするには大きな難点がある。ニギリの「リ」についての説明がなければ、

荷伐とニキの同意性主張は成立しない。

地名に用字されるキリ(切、伐、桐、霧など)は限(きり)の意を表す例が多い。これっきりのキリである(キリ地名については改めて取り上げる)。この例からみて、荷伐は傍限(ニキリ)の意であって、語がつづまってニギリになり、荷伐の漢字が当てられたのではなからうか。

もう一つの説明としては、語尾の「リ」は単なる添え語で無意味な語もある。畔(ほとり)、縁(へり)、隣(となり)などの「リ」がその例である『大言海』。従って側(にき)に「リ」が添えられてニキリ(荷伐)になった、と考えられなくもない。しかし、この場合はニギリ地名の実例が乏しく実証性に欠ける。

荷伐の解釈を「伐」から始めたが、

頭語の「荷」に手がかりが求められるかもしれない。人吉市上永野字荷ノ元(ニノモト)、相良村深水字荷把枝迫(ニハシザコ)、天草郡松島町教良木および内野河内字荷掛(ニカケ)、葦北郡芦北町古石字荷床(ニトコ)、宇土郡三角町戸馳字荷土(ニツチ)、阿蘇郡阿蘇町黒川字菅荷塚(スゲニツカ)、菊池市西迫間字荷留原(ニトメバル)が荷地名としてあげられるが、その追究は項を改めて行いたい。

荷伐の説明は不十分であるが、球磨村神瀬の字図を見ると、荷伐は杣ノ鼻(ソマノハナ)と隣接していて、ソマ・ニキの関係が濃厚である点を指摘しておきたい。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

話題を追って

「郷土」36号を発売

求麻郷土研究会

人吉球磨の郷土史や文化財の調査研究を続けている求麻郷土研究会(片野坂勲会長)は、機関誌「郷土」の平成28年度版、通算第36号を発売した。

掲載内容は、「八勝寺阿弥陀堂が国指定重要文化財になるまで」溝下昌美、「多良木町の

庚申塔」蓑田温子、「故・平山義之先生を偲んで」尾方保之、「新史料探しの苦心と成果」平山義之、「常秀院」ものがたり」竹田文郎、「日本甲冑の再現にあたって」宮广大、「寅助火事」復興五千両の借金と返済の記録」尾方保之氏など。後半はこの2年間の例会での調査報告となっており、人吉球磨はもとより宮崎県小林市の文化財調査など7つの報告が掲載されている。表紙は球磨郡湯前町にある「八勝寺阿弥陀堂」。

同誌は広く読まれることを前提に千円で頒布もしている。詳しくは同会事務局の尾方さん(0966・38・1922)まで。



すべての人を自分の親だと思って...



△ 龍生園 介護施設
○ 龍生園 介護施設
○ 龍生園 介護施設
○ 龍生園 介護施設

社会福祉法人 天雲会



〒868-0058 人吉市下馬田町原生田1057-8
総機部門 ☎0968-22-8821 FAX 0968-22-8822
在宅部門 ☎0968-22-2141 FAX 0968-22-2183
<http://park5.wakwak.com/~ryuseien/>
e-mail: tenunkai@ab.wakwak.com

編集後記

今年は何んという天変地異、回天動地の一年であつたか。年明け早々の大雪に始まり、本誌創刊の4月には「熊本地震」が発生。創刊を祝う気分にもなれず県内の状況を注視した。寄稿も地震関係が急増し、読者の中には今も不安を抱えたままの方が多いのではないか。夏のリオ・オリンピックで日本は沸いたが、E.U.離脱を決めた英国の国民投票、米大統領選で排外主義を売りにしたトランプ氏の勝利はグローバル化に行き詰まった国々の悲鳴か。★流域では新たな動きも見られた。震災を乗り越え励ましあおうという機運が生まれ、「八代妙見祭」の一部がユネスコ無形文化遺産に登録され、坂本町の「100人会議」が設立されたことは冒頭で紹介した通り。たびたびお伝えした「鶴之湯旅館」営業再開も地域を元気づける話題であつた。★今年は紹介することが出来なかったが球磨郡にある幸野溝・百太郎溝が11月に「世界かんがい施設遺産」として登録されたことも感慨深い(シヤレ)。来年、詳しく取り上げる予定である。★ともあれ時代は回る、読者の皆さまが佳い年を迎えられることを願い、本稿を閉じたい。(ま)

【購読者の皆様へ】 購読料を未納の方のみ偶数月に「郵便振替用紙」をお送りしています。払い込み号数を確認のうえ、ご送金ください。

〒868-0086
熊本県人吉市下原田町瓜生田675-3
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966-222-7601

インフォメーション

- 12月10日(土) ▽日奈久温泉「晩白柚風呂」(〜1月末 同温泉一帯)
- 12月11日(日) ▽第63回人吉駅伝大会(西瀬小学校スタート・ゴール)
- 12月13日(火) ▽雨宮神社例大祭(相良村川辺)
- 12月15日(木) ▽人吉労苦例会「高橋竹童 津軽三味線演奏会」(人吉カルチャーパレス)
- 12月16日(金) ▽年賀郵便取扱開始
- 12月17日(土) ▽年末助け合い「愛の美術連盟小作品展」(〜18 ひとよし森のホール)
- 12月17日(土) ▽エンブリー氏来日80周年記念シンポジウム(あさぎり町須恵文化ホール)
- 12月18日(日) ▽八代妙見祭ユネスコ登録「吉村作治特別講演会」(八代市厚生会館ホール)
- 12月23日(金) ▽第64回球磨一周市町村対抗駅伝大会(錦町役場スタート・ゴール)
- 12月27日(火) ▽くま川鉄道「クリスマスストレーン運行」
- 12月27日(火) ▽田舎の体験交流館さんがうら「収穫祭」(球磨村)
- 12月28日(水) ▽球磨川下り竿納め(人吉発船場)
- 12月31日(土) ▽官公署仕事納め
- 12月31日(土) ▽青井阿蘇神社「除夜祭」(同神社拝殿)



たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの
アイウェア
(たけだ眼科ビル内) ☎0966-23-3097

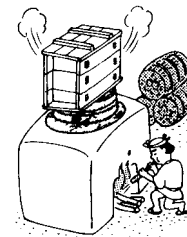
デイサービスセンター

ケアプラン作成所いずみ
(居宅介護支援事業所)

いずみ

協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

匠の枝



◆納豆みそ
477円(税抜)

◆納豆みそ
(お徳用)
300円(税抜)

御膳醬油



(だし入り万能しょうゆ)
・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円(税抜)



◆みそ煎餅
477円(税抜)

人吉散策コース 九州和食 蔵めくり
みそ・しょうゆ蔵



釜田醸造所
会長 釜田 元 嘉頭
社長 釜田 顕

〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話 (0966) 22-3164
FAX (0966) 22-3165
メール info@marukama.co.jp